

# 塔柳川

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可  
昭和四十六年七月二十五日 印刷  
昭和四十六年八月一日發行（每月一日發行）  
創刊大正十三年 通卷五三一號



No. 531

八月号



# 豚饅・焼売・焼餃子

大阪・なんば



TEL (641)0551~2

出張販売店

なんば高島屋/虹のまち鹿鳴/心齋橋そごう/梅田阪神/天満橋松坂屋  
京阪デパート/堂島地下センター/弁天阜頭支店/中之島サン・ストア

セドリック  
ローレル  
ブルバード 乗用車専門販売店

## 尼崎日産自動車株式会社

代表取締役 若本真彦

本社	尼崎市尾浜町2丁目3番27号	TEL大阪(429)5861(大代表)
尼崎営業所	尼崎市尾浜町2丁目3番27号	TEL大阪(429)5861(大代)
宝塚営業所	宝塚市旭町3丁目2番6号	TEL宝塚(87)2626~8
西宮営業所	西宮市下大市東町11	TEL西宮(52)1121(代)
神戸営業所	神戸市長田区2番丁4の2の1	TEL神戸(56)6725(代)
明石営業所	明石市船上町2の1の10	TEL明石(913)0234
篠山営業所	兵庫県多紀郡丹南町牛ヶ瀬字尾ノ谷29	TEL丹南局399
姫路営業所	姫路市御国野町国分寺56	TEL姫路(52)4181(代)
三田営業所	三田市字新土1610の1	TEL三田(07956)6501~3
加古川営業所	加古川市平岡町高畑字血池537の1	TEL加古川(23)3144

すりへらす生命と知らず逃げまどい  
お日柄も大安という事故現場  
塗りつぶした嘘の見事さ地が裂ける  
プライバシーはみ出している小抽斗  
来るものが来て背信の声尖る

## 中島生々庵



本田深花坊氏所蔵の故路郎先生の画。路郎忌川柳大会出席者に謹呈。

## 誕生日

七月二日といえば私の誕生日である。家族の者や他人様が覚えていて、お祝の電話や記念品を頂いたりする。何十回目かの誕生日やら忘れて終った私、今のところ指折りかぞえて計算したくもないし、その必要もない。日々好日の日暮しに努めているが、なんとしても一年の中でも一番凌ぎにくい月日に生れたものだ。路郎先生も七月十日のお生れだが、夏生れの者は暑さに強いのと、よく自慢話に申されたのを聞いた。事実先生も私も毎年梅雨明け頃から元気になるのが普通だった。その先生が七月七日になくなられて、肉躰

の限界を嫌という程知らされた。この十日に七回忌の法要を営む準備が委員達の手で大略終り、今日私の誕生日の朝この原稿を書き乍ら胸に迫るものはキザな言葉ではあるが、万感交々である。同時にこの限界のある肉躰を最後の一片まで大切にいたわり続け、最後の瞬間まで何らかの意味で有意義な生き方を精進せねばならぬと物々たる祈念が新しく湧き上って来る。そしてこれこそ満六年間の成長を支えて下さった故先生と全国柳界に対する報恩の万分の一と合掌する次第である。

川柳塔八月号

# 川柳塔八月号目次

座右の句

古くとも僕には仁義礼智信

(路郎)

私の句

負けん気でなしによかった娘が二人

高橋操子

題字・中島生々庵・表紙・直原玉青

誕生日

中島生々庵 (1)

川柳塔 (同人作品)

中島生々庵選 (4)

剣の修養と川柳の修養

八木摩天郎 (2)

川傍柳初篇研究 (九十七)

北川春巢 (24)

前田喜代人・故岡崎重義・清川端柳風・故高須唾三味丸

博美・藤井和雄  
十府・岡田甫

「句の生命」について (下)

北川春巢 (24)

近作柳樽

川村好郎選 (30)

秀句鑑賞

(同人吟)

菊沢小松園 (26)

(近作柳樽)

西尾菜 (27)

馬と大福餅

東野大八 (22)

麻生路郎七回忌川柳大会

戸田古方 (44)

近詠

(39)

## 剣の修養と川柳の修養

八木摩天郎

NHK総合カラーテレビ「春の坂道・柳生宗矩の生涯」の舞台で、一躍、柳生旋風を巻き起し、劍豪柳生一族の発祥地、大和柳生榎木坂を訪う人々が陸続、今も跡をたたない。私は曾って柳生の里に佇って、芳徳寺裏の柳生一族の墓や、里を見下す十兵衛杉や、沢庵禪師が愛した古楓橋の旧蹟、さては居城跡で転た「荒城の月」さながらの感慨にふけたことがある。

柳生新陰流は「劍禅一致」だと云う。禅を応用し、この流派を精神的とした。人をきるにあらず、悪をころす也。一人の悪をころして万人を生かす也とある。私は新陰流の極意は「大動小動」であるとも聞いたことがある。大敵とも動ぜず、小敵とも、あなどらず大胆にして且つ細心、これが剣の道である。

聖徳太子、千三百五十年の昔、十七条憲法を御制定になった。十七条憲法は天地の公道を示し、人の守るべき道である。天地の天は九で地は八である。九プラス八の十七が、十

川柳五十三次……(十二)	富士野鞍馬……(46)
偶然に……	高鷲亜鈍……(25)
白柳遺句集発刊のこと……	西尾栞……(40)
白柳ここに生きている……	菊沢小松園……(41)
初歩教室……	本田恵二朗……(56)
大萬川柳「シヨック」……	川村好郎選……(58)
川柳家の暦……(八月生まれの人)……遺稿	清水白柳……(54)
柳界展望……	(薫風)……(60)
本社七月句会……	(庸佑)……(46)
各地柳壇……	(文秋)……(63)
一路集「モーター」……	藤岡花梢選……(52)
「アルバイト」……	清水一保選……(52)
編集後記……	新岡回天子選……(53)
	(二三夫・葉子)……(65)



七条の柱である。

川柳も十七字詩型で、天地、宇宙、森羅万象、あらゆる事象を十七文字で表現する人間陶治の詩であり、禪に通じ、哲学にも通ずる。柳生新陰流の極意に口伝中「肉を斬らして骨を斬る」。川柳は「寸鉄人をさす」。剣と文とは、たとえ異っても、悟道の精神、修養の道には、かわらない。悟りの世界、自己反省の境地、これが川柳道の道であり、新陰流と一脈相通する。川柳は人間陶治の詩と云わるる所以もそこにある。

降るとみば積らぬ先に払えかし  
雪には折れぬ青柳の枝

これが新陰流の精神なら、日々のなやみ、日々の労苦、日々の事柄を、十七字詩型で表わす川柳とは蓋し、同じで、座右の銘句は大切に守るべきである。柳誌「川柳塔」の目次欄に、座右の句を掲載する。むべなる哉と思わしめる。

生きとし生ける我人生に川柳句(摩天郎)  
死ぬるまで川柳に生き、川柳によってよりよき生活、生き甲斐の人生、これが私の念願でもある。

(前号訂正。「いのちある句を創れ―これは私が大正十三年に……」)



中島生々庵選

大阪市 正本水客

例えばの話おんなはかたくなに  
砂の固りのように手がつなげない  
真直ぐな道こらが重たくて

朝の妬心を鏡の奥にしまいこむ  
純情の真ん中にある角砂糖

京都市 都倉求芽

もう戻れないとこへ来てから思い出し

わなないている木々へ黒雲の凝視  
金蘭の帯で夜も人形は立たされる

言訳がしまいにあっちこち飛火  
お隣りへ好かんのが来た指定席

大阪市 橘高薫風

路郎の忌 立膝癖も師父ゆずり

梅雨明けの雷どんと 路郎の忌  
路郎の忌 白の鉄線一花でよし  
路郎の忌 形見の肉池藍あせず  
路郎の忌 睡蓮水の旅つづけ

八尾市 香川酔々

大時計ゆっくり廻っている陽気  
瘦せた骨ラッシュの中に軋んでる  
メンデルの法則どおり女癖  
お遍路と並ぶ讃岐のひやしむぎ  
砲音が記憶の中にある画集

出雲市 尼緑之助

人間の孤独テレビに吸いこまれ  
仏さまりんごが皺になってます  
さてね酒となって気づいた誕生日

いかめしい花瓶野の花投げ入れる

N君の死

ちと早いのに童顔のデスマスク

豊中市 戸田古方

よっぱどよい目さしてるのかもしれず

賢い人かしらんが取ってはる噂

まだボスの尻尾垂れようとはしない

本心は身体が利かぬことでした

ちんころみたいに紐つけている過保護

青森市 工藤甲吉

ちんちんをさせられもう失保金

我れをはじめ当てにならないご一票

泣き声はみなうちの子に聞えて来

ホットパンツ六月無礼どこでなし

白魚を咽喉のあたりであわれがり

倉敷市 本田恵二朗

竹の子の歯応え郷愁ふとよぎり

君もマニア僕もマニア負けられず

ライバルの弱点探す日のおせり

冷凍魚不動の姿勢で値切られる

雨の音伴奏にして彫り進む

岡山県 浜田久米雄

また事故かそうかとぼそり言うただけ

旅仕度メモにしたのを消してゆき

欠席のころ呵責のかけらなし

佐渡が島紀行(二句)

本土への船まだ佐渡がついて来る

佐渡の海も一度来たい色に見え

伊丹市 小川静観堂

女性上位で得したことが多かった

用意・ドン・すなわちヨチヨチ走り出し

大の字ですねる恰好が可愛いうて

八十の平和へ孫め熱を出し

死にたけりゃ死ねと叱ったあの悔み

宇部市 石川侃流洞

ピアノどっかと据えて寄附には貸さぬ耳

家風にも馴れて実家へ遠くいる

結婚を許されお腹の子が動き

悪友のウインク六感ピンと来る

義理の子へ逆むかれまいと無理をする

広島県 高橋鬼焼

失言ときづいてくれる妻があり

包装をといたらくずれる子の期待

どの靴をはいても重い足の傷

働けぬ歩巾へ靴がちびて行く

正面に妻の目があり猪口をふせ

倉敷市 谷井扇水

ポツリポツリポツリ雷にいそがされ  
ホルモンののれんもさすが港町

岸和田市 高橋操子

聞き上手泣く汐時を誤らず  
表情が豊かで盲点つかめない  
実印をつけて総べてを過去とする

妻や子が居て吊皮が離せない

酔加減心得えている妻が酌ぎ

大阪市 不二田一三夫

キリストも何かを殺し食っていた

不機嫌な顔して作家起きてくる

反古紙のしわをのばしたように生き

寄席(二句)

ゼニとれる顔だと漫才ほめられる

客の顔西瓜のほすがもうあがり

倉敷市 田垣方大

枯木やと想うていたにさるすべり

針金にねじふせられた鉢の松

下駄はいて電車に乗れば眺められ

夕焼へ孫と歩けば歌になり

鳥取市 河村日満

総支部長を受けて

定年へくる役 断わりようもなく

わが影を踏んでとぼとぼ無職かな

境港にて(二句)

太陽の無い街角で酔いつぶれ

栄光の誠首と自負して見たもの

旅の恥かき捨て出来ず単り寝る

髭にもの云わせて法の裏を行く

高槻市 若柳潮花

人情に握手してから日陰もの

燃えつきて骨も残さぬ恋になり

かざら司へかむろ人形のように立ち

槍おどり螢光燈がじゃまになり

堺市 吉田圭井堂

長寿村の記録をこわす交通事故

乃公が出でずんば選挙静かなり

諺の通りになった三代目

扱いに馴れて毒薬意識せず

高槻市 傍島静馬

身代りに死んでもよかったなどと嘘  
口ぐせの養老院まで行かず死に

眼の疎い年寄りも拾い物  
ゴール前惜しやタイムのホイッスル

大阪市 金井文秋

恋も序の口みつ豆を二つとり  
あり余る金で偽物つかまされ

裏目うら目で下積が続きそう  
手を握る孫さよならへ放さない

大阪市 本多柳志

決論が出て再考の余地があり  
ドックから戻った若さふれ歩き

絵に書いた餅と知ってる手を叩き  
政治論傾聴に足るコップ酒

姫路市 隠岐不酔

町議まで政治家ぶってうそをつき  
言うだけを言わせておいて多数決  
君でなきやなどとおだてて左遷され  
最高の栄転俺の止まる駅

桜井市 岩本雀踊子

小さな嘘に土産がぶら下り  
五分の魂転落の詩をつづる  
めぐまれぬ金を汚ない物にする

仏縁にして老妻に日々の幸

岡山県 大森娯句楽

お帰りを待つ姐の音忙しく  
私何うしましよとは凶星なり

春の宿歌と笑いの部屋続き

手すさびに置き替えて見る植木鉢

守口市 村田瓢太

上越旅行吟

山菜攻め分厚いテキなど欲しくなり  
雪国の知恵 軒・庇深うして

川中島古戦場

雄たけびが聞こえて来そう草茂る

飯綱高原スカイライン

バードライン一向小鳥の声もせず

大阪市 吉岡美房

わがくらし縁なきコマーションの渦  
兄さんで居ってほしいとことわられ  
かあちゃんに弱いと皆が決めてくれ  
寂しさの塊り酒がからませる

倉敷市 水粉千翁

目測が外れ良心取り戻し  
サボテンの近寄り難い花愛す

(その二) 長女結婚

神様の声も聞えて結ばれる  
祝福へ背伸びの出来ぬ父が居り

大阪市 山川阿茶

恩師松本博士米寿(一句)

米寿よろらしい顔にかこまれる  
写経する気もちになった我が仏性  
クエッションがついたまんまでゴールイン  
スポンジのお乳房落した昼の銭湯

門真市 福島鉄児

退院後の近況

まだ命惜しく自重の日々送る  
まだ薬飲んで病人らしくなし  
日々好日薬忘れる日がつづき  
働ける嬉びを知るほど癒り

大阪市 西出一栄

達者なうちに旅はしとけと嫁に言い  
樹齢百年ヒマラヤ杉の魔物めき

女人高野室生寺にてクラス会

よそ眼には老人会と見るならん  
写真機も持たせて嫁に付添われ

八尾市 高杉鬼遊

さりげなくされど哀れに振られける  
会長へ軍手を脱いだ握手する

流行を追い越すほどの才もなく  
あじさいの重きに想う人のいて

姫路市 村上春巳

物干で俺を呼んでる梅雨晴間  
顔見せに帰れて父に甘えられ  
舌出して小さな嘘の電話切る  
金借りるハンコのふちがかけている

大阪市 中川滋雀

まだ生きてるらしい救急車のスピード  
朱を入れる余地はまだある人生賦  
真実は鏡の裏にある仮面  
アイロンを小まめに愚痴を妻の汗

大阪市 小出智子

自問自答素直な女になっておく  
しきたりに古い女でよいとする  
日日好日友の不幸が気にかかり  
黙っておれび双方へ義理が立ち

神戸市 仲どんたく

木の香無き新建材で家が建ち

湯村温泉(一句)

砂丘の馬これは素人だと見たり  
大過小過数々ありぬ定退す  
老兵のまだ消えやらず顧問たり

岡山県 浜野奇童

南瓜の座禪を組みし姿なり

公害ヘナスは淋しい花をつけ

逢いびきのその手でナース脈をとり

遅刻した訳ヘスリルも少しませ

松原市 谷垣史好

今日も梅雨空きみの睫毛の長すぎる

小銭しかなくても青春のポケット

制服を着て気味悪い大学生

家は西向き犬小屋は南向き

大阪市 川口弘生

胃潰瘍花の見舞客つづく

花咲いたあとを毛虫に驚かされ

裏富士の物淋しさを知るも旅

家がないからナメクジの馬鹿にされ

兵庫県 大江秋月

風鈴も今日の暑さへおし黙り

宝くじどの番号も当りそう

ローカル駅雀安らかに巢をつくり

何年ぶりやと螢の匂いかいでみる

富田林市 岩田美代

虚ろさは仏を悼む瞳ではない

ゆるしがたいポーズのひとつ懐手

愛ひとつ未完にするから美しい  
裏返す量に平和賭けてみる

大阪市 有信新之助

巾広くくらしして恋もソツがない

気懸りなとこで止った聴診器

そうめんを明治はスマーに食べ終り

お大事にと看護婦さんの声になり

愛媛県 渡辺暁童

大判を掘りあてるより策が無し

すてられぬ箱母親もそうだった

悼柳原三樓氏

川柳即生活一貫五十年

TVニュースのロングショットになでられる

大阪市 河井庸佑

方便の嘘と知らずにおこり出し

言いまけて勝気な娘承知せず

風邪なんぞひいておれない予定表

原稿の通りに違う活字入れ

高槻市 山田季賛

借金が出来る間と賞めてくれ

工事終る公害問題だけ残り

閉鎖と言う淋しさが有り工事終る

引越しの荷物梅雨晴を見て運び

大阪市 児島与呂志

失業と云うのに綺麗な爪で居る

台湾旅行

そこからはお世辞とわかる返事する  
その辺の嘘は適当にあしらわれ

特高の目付きを夜の街にみる  
権力の空しさ故宮博物館

へそくりをするなど妻によう云わず  
嵩高い女に成って適令期

奈良県 石倉旅風

松江市 中川晃男

絵葉書は売って切手は無い名所  
果物屋ガラス戸閉めておく寒さ

御意見もなく受けられて頼りなく  
営業用の微笑たたえてだるくなり

こんど目もおくれて来たぞ呑気者  
親馬鹿は斯くの通りと七五三

恋文にしては安手なボールペン

後ろ影角を曲って寒い月

前回分

兵庫県 遠山可住

奈良奈良と奈良を褒め過ぎ奈良に住み  
大和路を歩き残して旅の宿

寝に帰るだけの夫の座る位置

気がつけば道の色から十二月  
九州のかたちの雲にはいる月

仲人が来てうちの娘がもう二十才  
隣りから出て中傷とすぐわかり

八尾市 飯田一治

ひと言はしゃべらなならぬ口を持ち

倉敷市 小幡里風

達筆に書くから俺にわからない  
何時見ても人形の笑顔こちら向き

澄み切った瞳に嘘が封じられ  
心境を笑顔で探る日の佗びし

旧姓に戻り再婚ほのめかし

君のすべてを奪う僕のエゴ

堺市 高橋千万子

そうだったのかと合点のゆかぬ顔

共稼ぎしこりをだいて右左  
いつわりのび笑素颜にもどらない

愛知県 大谷月都

寄りつかぬ娘を倅せと里の母

印鑑を持たず役所に来てしまい

尼崎市 高津 徹也

湖にうつる三日月があり恋終ゆる

祝儀ならもらっておくと念を押し

君僕のなお一線はくずさない

香川県 岡田 拳法

つい本音洩らせば放言だと騒ぎ

倒産が見えず罵り合う派閥

もう少し制約されず暮らしたし

鳥取県 森田 布堂

モデル地区蠅も螢もみな殺し

写生するバスが逃げたと兎に泣かれ

明日あるを信じて金を貯め続け

堺市 藤井 一二三

財布見てスリも不況を肌で知り

ネクタイの結び農協連れと知れ

私鉄スト

日傭いの身をしみじみと私鉄スト

東大阪市 斎藤 三十四

電柱がパート奥さん探してる

愛人がある方の娘に嫁の口

ストシマスお願いしますと虫のよさ

名古屋市 吉田 水車

値段表よりという字の小さいこと

天の邪鬼階段を歩きけつまずき

貫らわれて来てシャボテンは痛たがられ

大阪市 水谷 竹荘

仏壇の花活けかえて糸図見る

ヘルメットかぶれば鬨志沸いてくる

鉛筆をけずり小さな黙秘権

倉敷市 藤井 春日

女性上位わが家の家計ゆるがない

勇退の吾れ大鵬のころしる

病気だけ重役なみと云う社員

倉敷市 野田 素身郎

父死去

父逝った当座は飯を炊きすぎる

後はもう任したよというデスマスク

葬式を養子の意地が派手にする

大阪市 天正 千梢

勝つ事を求め幸福すてて行き

火鉢の手すりです足る朝の膳

拝む心一冊の縁におしえられ

鳥取県 清水 一保

食欲となって労働報いられ

書き足りぬ便りの一句つけ加え  
ガソリンが切れたと晩酌乞い願ひ

平田市 久家代仕男

成金の目に阿呆らしい手内職  
責任を逃れた口で訓示する

大阪市 福井野迷路

子と語る新語辞典の智恵も借り

大阪市 奥谷弘朗

これ心王者の如く歩ませよ  
考える余地を残すと云う理屈

名案に片膝打ってそれっきり

黙ってる方が無難とするずるさ  
持ち味も出せずに定年来てしまひ

お人好し人の溜息まで背負ひ

夕立へ雀も仲間と雨宿り  
人生を鈍行ですごし無事な日々

和歌山市 垂井葵水

おしゃべりのネタに困らぬ裏長屋

代々ののれんにかわる自働ドア  
もつれ解き蝶は恋人見失う

扇風機の輪に帰省子の裸入れ

趣味の方怠り近頃儲けてる  
古稀過ぎてまだまだ馬鹿にようならず

笠岡市 木山遠二

憲法を説かれて老の泣寝入り

京都府 松川杜的

東寺の五重塔雑感

王朝を偲ばす光芒塔に浮く  
晴れてよし曇ってもよし塔の位置

直角に車窓へ塔の位置動く

岡山県 池田古心

自惚れが擬餌の甘さに釣られけり  
モンペ穿く嫁ででっかい三面鏡

結構な身分と褒めるのかけなすのか

神戸市 小浜牧人

元来が裸一貫受けて立つ  
二死満塁次のドラマに息を呑み

ビールなら飲めます妻を連れて出る

藤井寺市 西いわを

預っておくとは貰う積りで居  
お隣と話込むのも覗き趣味

三井寺参詣

晩鐘は警笛にさえ遮られ

松江市 小林 孤呂 二

カレーライスへ六桁の人と誰知るや

少し弄って定期移動終りけり

浅学非才と云わしたくない子を育て

大阪市 江城 修 史

命なき造花の声を誰が聞く

憎しみの瞳にエゴが燃えている

生きる汗人それぞれに黄昏れる

今治市 越 智 一 水

軍隊の要領今の世も通り

繭子ひとりこけしを父として慕い

降るときに雨降ってくれ有難う

岡山県 直原 七面山

夜を彩る愛の睦言

旦那返えした後へ情人

恋求む女へ愛の矢を放ち

大阪市 宮尾 あい き

長男も嫁の実家へ近く住み

さばけてるつもりやっぱり嫁に妬く

鈴蘭へ身の程知らぬ蠅が来る

島根県 堀 江 正 朗

雨の夜ベッドの妻は何思う

妻・妻と書いて退院待ち続け

腹立てまいと行きたくもないトイレ

米子市 林 瑞 枝

笹巻きの乳房の母とも似る白さ

はばたきを見守る母にある孤独

ハンドルに蝶の舞い込む初夏の朝

米子市 八木 千代

久々の素足へ女たかぶって

あの人の立場が今の胸にしむ

里帰りあくびの所作も少女めく

鹿児島市 土岐 トク子

いく年かみとりて逝きぬ姑の微笑む

ライラック植えかえられたも知らぬ梅雨

団らんの名残りを惜しむとおまわり

芦屋市 丸 川 初 甫

原色と若さが夏の海にする

衣食住足りてる顔で断わられ

鯨尺三十年の色と艶

大阪市 河 野 君 子

九島を臨む

段々畑の汗のしずくか雨ぱつり

旅有情袖すり合うた人を恋う

なす漬けのもう感動の色でなし

倉敷市

小野克枝

孤独に灯ともして生甲斐を探す

おみくじの嘘を信じた固結び

夫と子を語り幸せそうな顔

和泉市

西岡洛醉

都会から脱皮も出来ず衣・食・住

九十円つり銭たしかめ几帳面

梅雨三日挑戦するよに降り続き

東大阪市

宮西弥生

和服着て歩巾を合わすひとと居る

調和音乱れし女の思慕深き

曼珠沙華真赤に燃えて誰を待つ

大阪市

河股緑水

このままで寝かしてあげたい雨の朝

判決をいま待つ如き診断日

退院へ小指の痛い靴を履き

岡山県

横山一声

佐渡の旅

島の娘も観光ずれの厚化粧

おけさ節教えてもろうてわかめ買い

島の娘の名残のおけさ忘れず

小松市 馬場魚山

話込んでいると思えば嫁のこと

トマト画いたつもりが南瓜にも見える

旅できぬ哀しさ旅の本を読み

大田市 藤田軒太楼

連休が雨で家計簿息をつき

的少しずらして出方待ってみる

傷心へ小蠅うるさくまといつき

大阪市 今西章雅

密などいらぬと遺言つらぬかせ

顔に艶ないと寝酒をすすめられ

猫の子もきりよう良しから貰われる

兵庫県 河原みのる

月光菩薩示し給えり指の丸

この上に欲はひ孫の肩車

たつ鳥の配る心がいとしすぎ

繭子家出

大阪市 室谷徹舟

暇すぎて日曜出勤こより燃る

痛い程解るが俺も金がない

昼も夜も淑女で妻の味気なさ

守口市 羽原静歩

今治にて(二句)

風薫る伊予路の春の遍路笠

コップ酒長者番付こきおろし

退院が近いと思ううす化粧

和歌山市

野村太茂津

昭和元禄朝食のない日が続き

公園の鳩もおもねる奴が居り

ユーモアを追求すれば白けきり

島根県

小砂白江

風化した恋の音して義齒鳴る

身をまもるための微笑み絶やされず

峯寺吟行

峯近く古刹の苔に陽があそぶ

岡山県

出原敬一

ぜいたくな愚痴へうなずく義理があり

額の字の意味には家族ほど遠し

質屋へも通わせた肩揉んでやり

愛媛県

村上旭童

鍼灸にかえてそろそろあきらめる

休耕へいつまで豊作つづくやら

胃カイヨウの先輩腹を切れという

笠岡市

松本忠三

演説へほっとした気で拍手をし

澄ましてた誓の写真が眼をつぶり

父の日というに家族の知らん顔

八代市

永松道雄

卒えた娘の花嫁修業の座りだこ

草の間にヤセ菊の花生きかえり

乱れゆく世へ明けの鐘身に泌みる

堺市

伏見茂美

季節感ぼけて浅漬まだ漬けず

ネグリジエを浴衣に替えてみたムード

まけとくと小銭は軽うあしらわれ

大阪市

西川誓二

気が合うと利害の上の仲のよさ

身を守る心にフトしたすき間風

いつ咲くか高嶺の花に夢賭ける

貝塚市

野坂つき子

汐の香を土産にしたい能登の海

感傷に浸る間のないスケジュール

意地はって折れるチャンスをもた逃がす

鳥取市

小林由多香

決断をうながす方ももめている

珍客の連続家計を狂わせる

故郷の緑カラーで持ち帰えり

東京都 増田次章

百万人外遊まだ順番が来ないらし

進みすぎ遅れすぎ時計の運命

悲しいが彼奴も背のびしすぎて

東大阪市 竹中肖二

天理に三週間籠る(二句)

懺悔して心の重荷置いて来る

起居しばし天理の空は澄み渡り

失職を自分で労わる程に老い

大阪市 飛田好一

断酒して(二句)

酒だけを生甲斐とした愚を悟り

質上げへ団結の二字腕にまき

セーターの重さに春を身に感じ

笠岡市 木山要次

あと味のわるさ隣の子を叱り

十円を蔑む子等の羨まし

賽銭に掏摸の稼いだ銭もあり

下関市 志賀木石

更衣シャツの袖なとまくろうか

飲む酒に吞まれてみたい時があり

酒酒酒素直に酔える妻の酌

大阪市 宮地双楽

達磨にも運不運あり選挙戦

自己過信相手の肚をよみちがえ

天降り役人ならむ世間の目

竹原市 森井菁居

子を二人入れ有難く風呂に酔い

アパートの狭さを文化的と言う

打ち解けてからをうっかり傷に触れ

堺市 吉岡青香

何もかも知っているから邪魔にされ

しりに敷き呼び捨てにして仲がいい

顔見せるだけでプラスになる顧問

新宮市 大矢十郎

集金へ憎悪幼い目に射られ

ガム噛んで少女の嘘は母に似る

道で逢う妻は昔の顔をする

呉市 林野甦光

きっちり定時に来てへたくそな講話

コンタクトレンズに誤植見破られ

ごみ溜めのようなデスクに花一輪

宇部市 平田実男

ホステスの稼ぎを聞いて酔が覚め  
自慢ともとれる資産税の愚痴  
御近所の不幸を例に保険が来

笠岡市 出原真奇

何時の間かドラマの主人公になっている

夕食に招いて娘の恋すすむ

内祝い夕飯ちよっぴり豪華版

松江市 岡崎祥月

妻にだけ心の窓をあけはなち

見栄というベールをぬげばいい女

老いてなお元気眼鏡の曇り拭く

松江市 吉岡通児

おならびがすめばおうたの幼稚園

時としてロケの修羅場となるお嬢

大臣放言中に三割弱の嘘

松江市 柳楽鶴丸

物価値上げ僕の血液が薄くなり

恥しい姿を鏡に教えられ

秘密の時間鏡に向う妻

松江市 恒松町紅

物売りの声から日曜朝になり

雨もりを気にせぬ程に年をとり

馬鹿々々しい話に腹も立ちそこね  
倉敷市

竹内翁童

社長が座って貸切バス静か

結局は社長好みになる会議

義理で来た会場派手に拍手する

西宮市 島居百酒

散る花の悟り禁煙また破り

小康が医者にかくれて不養生

能はなく年功序列だけ頼り

富田林市 浅川八郎

素足からこぼれる色気も女なる

苺ドロ畑に鍵はつけられず

奈良県 西辻竹青

金出来て金では詰まぬ病いが出

我が道を行けと言わぬがチトおかし

東大阪市 竹中綾女

主人天理教の講習に三週間行く

梅雨寒むに天理の夫をふと想う

百合活けて夫の帰えりを待ちわびる

★

菊沢小松園

血を売った金で子供に会いにゆく

なるほどと思うところにある便所  
裏切つて見ても善人高が知れ  
そのままの姿 画になる懐ろ手  
星くずを継いで亡母の名にならべ

川村好郎

哀れさを語る女にある微笑  
屈辱の過去消しゴム持ったまま  
時計また見たぐらいで愚痴やめず  
やり手よりまかせる人を撰る会議

松江梅里四年祭

願ひ合う心靈前の灯がゆらぐ

若本多久志

後継者そうやすやすと出来てこず  
これが最後の入れ歯とならん念を入れ

京(二句)

太鼓腹した石仏もあり石峯寺  
父権地に落ち種馬の老い嘆ず  
父子論争長髪を切れ 切れぬ

(前号訂正—底流に老いへの蔑視見て寂し)

北川春巢

共稼ぎの顔せず女係長  
アナウンスを女の声にしたサーピス

結婚指輪はめ通勤車眠りこけ

大阪市立高等看護学院長拝命(二句)

九十度転換をして頑張る気

時限区切るベルは命を刻むよう

西尾葉

蜘蛛の罟を蜘蛛ゆさぶって蜘蛛も暇

噴水へ今日の孤独もまたたのし

茶の間の叔母のプライバシーにふれる声

手をつなぐ道月見草咲いている

旧友に歯医者にいるを思い出し

お待せしました！

## 清水白柳遺句集

ここに完成しました

序文・中島生々庵主幹 (定価六百元・送料百円)



★白柳さん、正に全国川柳界にとっても大先輩として、貴重な存在であった。

(中島生々庵)

★私が出版した句集(老いの坂と親ごころ・子心)は二回とも、白柳さんの温い指導と援助を仰いだ。(若本多久志)

★柳社を超えて、東奔西走川柳の社会化、新人の開発育成に尽され、それを生き甲斐にされた。(川村好郎)

★川柳に対する情熱と執念は、自ら川柳狂を名乗るにふさわしいものがあつた。(西尾琴)

★川柳生活四十数年の想い出の中に白柳とはただの一度も口争いや口論をした記憶がない。(菊沢小松園)

急逝の直前まで、句を集め、B6版のスタイルまで考え、いつでも出版できるように準備しながら、ついに「清水白柳遺句集」というタイトルに変わってしまった。白柳さんの声は聞えなくなつたが、その柳魂はこのように生きている。(八月の本社句会を「清水白柳遺句集」刊行記念句会とします)

発行所 大阪市南区巖谷仲之町二〇 川柳塔社

### 川柳塔社常任理事会

七月の常任理事会を南御堂会館視察後ということで、まず、三日午後三時に会場前集合となる。栗、古方、静馬(与呂志、滋雀氏は幹事として)文秋、柳志、形水小松園、多久志、庸佑、一三夫諸氏が、会場内を視察、最終的な打ち合わせをした。

懇親宴会場になる洋室で全員冷コでノドをうるおし、ホームグラウンドへ行く。

あと数日に迫ってから、兼題がむずかしすぎたとか、案内経路がややこしいという声が出た。半年も前からPRしていたのが、なんの意味もなく、これはこんごの課題となるだろう。

主幹がご不在で、多久志委員長から「せいろそば」などがふるまわれ、討入り前夜の義士のそばという感じだった。

主幹が出席されてから話はずみ昼夜組は軽い疲れをおぼえた。夜の出席者は万的、鬼遊、史好酔々、新之助諸氏が参加合流。

# 川傍柳 初篇研究

(九十七)

前田喜代人 川端柳風  
岡崎重義 高須唾三味  
清博美丸 十府  
藤井和雄 岡田甫

591 むごくおし付て十文上げましやう

一 甫

岡崎||不詳。誰が何を押しつけたか、シチュエーションの見当がつかずお手上げ。

前田||深く掘り下げずに、十二、三文か、もっとそれ以上のものを値切る場面。安値にむごく押付けて、十文あげましようというところ、安値にかけねの場合よくやる手である。

藤井||前田説か、それ以外見当がつかないから。

川端||ひやかし半分に大中に値切ってみたら、相手も意地になって「江戸っ子だ気前よく……」と安値を承知したので、いままらことわるわけにもいかず「上げましよう」と「むごく」を対比したのである。高須||「十文上げよう」と「おしつれる」のが「むごい」とは何か?高いものを安く

値切って買うにしても、その表現が理解できぬ。何か当時の事物でそんなものはないか。

丸||不解。全くの駄労働であるが「ひやうきんにするなと姉にしばりつけ」(八・12)「あねむすめしめしを当ててさつげられ」(二・29)のような場合、「十文あげましよう」はお小遣いではあるまいかと考えている。「むごく」の表現が気になる。

岡田||小生も丸先生のように、飛び廻って遊びたい女の子に、むりに子守りをさせる句と解していた。

592 恥しさ花嫁みけんじゃくに成

五 扇

川端||眉間尺は中国人の名前。千将という剣工が剣のことから楚王のために殺されたので、その子の眉間尺は死して父の怨みを報せんと誓い、みずから首を刎ねた。王は

この首を七日七夜煮て蓋をとってのぞいたところ首の口中には名剣がふくまれていたので、その吐きかけた剣で王の首は鍋の中に落ち、煮えた湯の中で二つの首は噛み合った。これを見た千将の友人もまた自分の首をはねて、王の首をこの二人の首がかみ破ったという故事。句意は花嫁が双生児を生んだので恥かしいのである。

高須||眉間尺は眉の間が一尺あったのでその名がつけられたという。花嫁さんが眉をおとして眉間が広くなった。それを恥ずかしいといっただけの句と思う。

前田||礎稿に替。遠まわしの趣向で面白くない。

清||眉間尺には高須説の意味もあるが、主題句はやはり礎稿のように出産を詠んだものであろう。

藤井||花嫁は結婚早々で妊娠すれば花嫁の

「花」がとれて「嫁」と呼ばれるのが川柳の慣用だ。例句として

花の実の散る頃股に実を結び

実のならぬ内が夫婦の花盛り

花に実がなると毛虫をおっこし

で、私は毛虫(眉)をおとした花嫁さんの

恥ずかしさとの高須説に賛。それに生首二

つ互いに噛み合う故事の首二つから、赤子

二人の連想は余りに惨酷ではないか。もつ

とも川柳大辞典には「首二つ即子持」と簡

単に書いてあるが。高須さんのすつきりし

た解に敬服。

丸||高須・藤井説に賛。花嫁はやはり藤井

説のように考えねばなるまい。

岡田||同。眉をそり落としたのである。

593 植たを見やふと金杉門へ出る

眠狐

川端||金杉町は芝と下谷にあり、芝は品川

に、下谷は吉原に近い。当然ここでは下谷

の金杉町で、上野の花見から吉原の夜桜へ

廻るところである。「植えた」は突出しの

ことか。

高須||上野の桜は自然の桜、吉原の桜は植

えたもの。だからその自然なものより植え

たものを見ようというだけの句。

前田||前説に賛。

しつてるに駕かき桜植えました 傍二・14  
花迄も盛りがすむと置かぬとこ 七・31  
葉桜に成って門なみ抜いて捨て 傍四・30

「花を植る事おかしはなかりしに寛保元酉

の年云々」(吉原大全)は、よく知られた

仲の町の桜である。

藤井||高須説完全。「植えたを見よう」で

動かぬところ。

丸||諸説賛。

岡田||吉原仲の町の桜は一カ月。毎年わざ

わざ山から運んで来て植えたのである。

594 ほうさんこれハ憚りと腕を出し

川端||上野護国院では毎年正月三日、餅を

湯にひたし、参詣者にのませるのを「大黒

の湯」という。この湯をのむとかならず願

いごとが成就し、その年はよいことがある

というので参詣者が集まってきた「お福の

湯」ともいう。

谷中への年始三日と当てて置き 三〇・16

いろは茶屋大黒の湯がやゝんで来 二・7

年玉の茶碗をむいて護国院 二・31

高須||上野三十六坊の一たる護国院に奉祀

してある藤原信実筆の大黒天の画像(京都

七福神の一つ)に供えた餅を湯に浸して、

その重湯を「大黒の湯」または「お福の

湯」と称して正月三日詣人に接待した。そ

れを「坊さんはばかりながら」と腕を出し

て頂いている句である

前田||両説に賛。ことさらに腕といったの

は、腕の外に竹筒などが用いられ、これら

が販売されていたからである。

丸・岡田||賛。

595 大あばた亭主のつらをはりに来る

眠狐

川端||「大あばた」は例によって持参金付

きの娘。甲斐性のない亭主の顔を小判で張

っている。

高須||持参嫁の句。「カネでツラを張る」

という俚諺をとって、それをいっただけの

いやな句。

前田||賛。平凡。

あばた得心で勘当ゆるされる 一四・39

丸||賛。甲斐性のない亭主なら以て冥する

こともあろうが、親に説き伏せられた息子

なら——多くはそうだが——こう評せられ

ては浮かぶ瀬もあるまい。

岡田||持参金の威光で大きな顔をされるの

では浮かばれまい。それが美人でなくとも

十人並みならともかく、満面アバタの醜婦

では……。

# 馬と大福餅

## 東野大八

私は犬のほかに馬が好きである。顔が馬のごとく長いからだという人がいるが、これは憶説である。

洛陽攻略の際、私は兵団本部行李隊に所属し、兵団長やその将領と行をともししたが、実のところ兵団公用行李の運搬人、一口にいえば兵団お抱えの馬方人足であった。

私の馬は、受領したときくつわの革具に「綾桜」の荷札をつけていたが、私は結婚式場からそのまま入隊するという哀れな花ムコであったので馬の名を八重ちゃんにつけた。サカズキごただけのわが処女花嫁の名であることは論を俟たない。私とその名を呼ぶとすぐこちらをむいて、うれしそうに長い耳をびくびくさせる。雪の如き美しくしき白馬で、そのつぶらな大きいヒトミは、毛並の白さに一きり際立つ漆黒の黒眼で、明眸玉立の文字を思い出させた。

劉の玄徳の軍師風統は、白馬に乗っていたため、敵の飛箭の集中攻撃をうけ、落鳳坡で

惨死した。この故事からすれば、白馬は戦場の厄馬とされている。しかし、私は敢えてそれを選んだ。花嫁の八重ちゃんの因果は、もはや私の不幸でなければならぬ。生死を賭けた人間情感の哀切さは、愛することの深さにおいてより強靱たりうる。楚歌の頂羽の霸王別姫の故事にそれはつながる。

洛陽攻略作戦が終ると、私は熱河省東南辺境の部隊に転属を命ぜられ、白馬の花嫁と涙の別離を演じた。赴任地は朝陽一いにしえの山戒東胡の地で、戦国の燕、秦に属し、漢代には匈奴の地であった。ここは一名三座塔といい、市中には井然たるラマ塔が中天にそそり立っていた。三塔のうち、一塔は兵火に遭い、風化に損われて欠損し、私のいたときは二塔でしかなかった。

私はこの街で再び馬とめぐり合った。黄河のほとりで涙の哀別を演出した白馬をまるで裏返しにでもしたような栗毛のチャン馬であった。まるでパチンコ屋の裏回りのアンチ

ヤンの如き下卑た鼻づらである。仇名の好きな私は早速に「金太」とつけた。エノケン映画のチャッキリ金太の連想による。

私はこのあんちゃんの背にゆられ、毎朝、朝陽站(えき)の軍事郵便局まで、郵便受領に赴くのが日課であった。朝陽近傍にある街や部落に駐屯する兵団本部や大隊本部の公用書類に、一般兵の軍事郵便を発受信を担当してのことである。距離は往復約四キロ。

一装用の服に三つ星の上等の兵隊のエリ章をつけ、星の輝く皮胴乱を肩にさげ、鞆には赤行装をつける。街中ではゆらりゆらりと、行きあう在留邦人の奥さんや娘さんたちの会釈をうけ、街外れにおよぶやハイヨーと一ムチあてて疾駆におよぶ。今様なら走れ、走れコータローのメロディである。しかし、時には陽光うららかな風の中では、杏花の一枝を背におい、馬上の君子気どりでゆったりと馬腹の動じるにまかせるといふフウだ。

青年客気は馬上にしかずとは孟浩然の粹言だが、それに加えて花を背い、はたまた青い揚柳の一枝を鞍にさすにおいては、まさに唐詩選の公子の風流もさこそと思われた。だが打ち乗る馬が風采のあがらぬチャン馬とあっては画竜点睛を缺く。されどそこは匈奴の朔北の国、寸足らずのチャン馬とて、かえって親愛の情をいや増す風情ととれぬでもない。

さて、この風流の春馬行に、余輩にとって最大の喜びが一つある。それは途次口にする大福餅がそれである。南塔の下にあるその菓子舗は、わが隊の酒保に甘味品を納入する御

用商人で、気さくな九州なまりを用いる親父さんである。なぜ、日毎の大福餅かと申すなれば、初の日のこと、私は試みに皿に余った大福の一つを馬の金太の口辺につきつけたところ、彼は忽ちパクリとそれを一つのみにしてしまった。馬が大福が好物であると知ったのは、けだしこのときのことである。爾來、馬の金太は、この店が眼に入るや、いかに疾馳中といえども速歩となり、店前におよぶやピタリと停止する。かくて大福を口にしな限り、棒杭さながらテコでも動かない。大福餅はかくの如くでつねに金太には五个を要した。

ある日のこと、金太にも一皿をあてがひ、例によつて馬上の馬顔將軍も軍帽をとつた頭にさわやかな春風をあてつつ、長々とやわらかな餅肌をひきつつ、上茶の味を満喫してゐた。

ところが、そうした太平楽の私の眼の端にチラと白い顔がよぎり、そして消えてはとまった。その速目に隠れる箇所は、その店の数軒先にある民家の門口で、観音びらきのその小さな門扉の間に、問題の白きものが出没するわけだ。私はその白さに直ちに女を感じ何度目かに若い娘のそれと知れた。私は生來多情多感である。加うるに拘束鉄の如き軍隊のいとむつけき野郎共の壁である。女子知ただけでもうつきとりする。いわんや、今まさなる門下の白き貌は、明らかに余輩に絶大なる関心を示しつつあるようだ。

そこで近くにいるその店の傭人の現地人に

口をきいた。

「女が見ている、なぜだろう？」

日本語を解しないその漢民族は答えた。ブローケンながら余は若干シナ語を解する。彼答えていうよう。

「彼女がミテイルのは、大人ではなく、その口の中にエンカされつつあるモチの方でアロウ」

実のところ、その直言にがっかりしたが、私も人の子、現地召集兵である。占領下の飢民の上に思いを馳せ、唐の太祖の如くオーヨにいった。

「大福餅二十個を彼女に持参せよ、その代価は余が支払うでアロウ」

話はそれだけだが、翌日に続く。話はこの日が焦点である。

その日も大福餅の昼下りである。パクつく私の前に、中年の貧相な現地人がおそおそと近より、百べん叩頭して私に言う。

「昨日、大変結構なものを頂き、家中で大感激しつつ押し頂いて食べた。誠に御多用中申兼ねますが、拙宅でお茶などふるまいたい」

時計をチラとみて、よろしいと快諾して私は、大福をどっさり包ませ、その男のあとについた。その態度、水滸伝の宋江の如し。門扉こそついでているが、その家は土箱の如き貧家の一屋で、植木一つない殺風景な空気を一またぎすれば直ちに一むね切りの住居に入る。薄暗いその一間には若い女がひっそりと坐っていて、三つぐらいの薄汚い子供がキ

ヨトンとその膝前に坐っている。娘とみたのは私の遠目の誤り、彼女は太々（おくさん）だったのだ。

私は上りがまちに腰を下ろすと、女のさし出すぬるい茶を手にした。落ちついてよくみると、女は三十前後だが、貧しさがその肌にあらわで、小ジワが粗々しくその顔中を切り刻んでいる。だが、身体つきは小ぶとりで、見ようによつては至極肉感的とも申せよう。

伏目になって女はやがてもぞもぞしはじめた。何をはじめるのかと思うと、何と褲子（ずばん）を脱ぐ気らしい。私はそれと察すると反射的につつ立ち、傍らの餅の包みを取り切れたアンペラにすべらせて女の膝に届かせ

「そんなバカなことよせ」

とどなって表へとび出した。すると愕いたことに、子供をしつかと膝に抱いた亭主が、表の扉の裏側を鼻さきにして黙然と冷い地上に坐り込んでいるではないか。私はちよつと肩にふれ、ふり返つたところをビンタを一つ。膝から転げおち、ワッと泣く子に眼もくれず

「手前の女房を、亭主の貴様が……」

私はそれだけいってあとが続かず、憤然と表戸を蹴破るようにして飛び出した。

馬の金太の背で、馳けに馳ける私の眼に黄河で別れた白い馬の姿がよぎり、それがいつかわが処女妻の顔になり、その澄んだ眼に微笑のうかぶのが見える。敗戦の八月を迎える毎に、私は肌やむらかたに大福餅を想ひ、彼の貧屋の一家をまざまざと回想するのが常である。戦域の飢民はその如く哀れである。

# 「句の生命」について (下)

北川 春 巢

## (三) 物価の変動

これ小判たった一ト晩いくれろ

この句は「柳樽」初篇の中でも有名な句である。「小判」というのは大金であるので、庶民は持つ機会が少なかった。たまたま手に入れた小判に対して、どうか今夜だけ一晩家にいてくれ、明日になれば支払いをして、なくなってしまうのだから……」

という、庶民の願望の句であると私は解していた。しかし、小判が大金であるといつてもその実感は分らない。調べる気になった。

小判一枚は現在の二万円ぐらいだとすると、大体一両は現在の二万円ぐらいだとある。仮りに現在「二万円札」という紙幣があるとすれば「二万円札」に対する現在のわれわれの感覚と、この句の小判に対する感覚と同じものと見てよいだろうか。貨幣価値はたとえ同じであっても、感覚的にはとても考えられない

のである。

現在では中学校を出ただけの少年労働者でも、金の卵といわれて、月収三万円以上はある。年収にすれば三十六万円以上で「二万円札」十八枚以上という勘定になる。

ところが当時江戸庶民の年収はどうであつたらうか。下級武士のサンピン侍というのは年に三兩と一人扶持だったという。サンピンとは数字の三と一ということだ。年に小判が三枚である。

また、いうまでもなく小判は金貨である。

ひとつにはこれが貴重なのであろう。金貨のほかに江戸時代には銀貨、銅貨があり、別々の体系でこれらが流通していた。小判一両が銀ならば六十匁、錢(銅)ならば四匁(四千文)というのが、当時公定の比価であつた。しかし現在の如く、一万円札で物を買って釣りをもらうように、小判一両で買物をして、銀や銅で釣りをもらうような具合にはいかな

かつた。両替屋で手数料を出して、いわゆる両替えをしてもらわねばならなかつた。せつかく手に入つた小判もひと晩でおさらば、というケースが多かつたであらう。

元禄時代といえば「柳樽」初篇発刊の約百年前であるが、西鶴の書いたものによると、一日百文を儲けることはむずかしかつたとある。一日百文といえ、年に三五〇〇文、つまり十兩(小判にして十枚)以下である。

一カ月に小判一枚の収入はむずかしかつたのだ。「柳樽」の時代には、あるいは貨幣価値の下落で、これが小判一枚ぐらいいはなつていたかも知れぬが、ともかく小判一枚の価値はこれで想像できるであらう。こう考えると、はじめの句の感じも分らうというものである。本稿のはじめに書いた大阪城石垣の総構築費は、各大名が醸出した銀の総額から(銀二十匁〇二万円)として計算したものである。

江戸時代のはじめなので、銀二十匁が一両であつたのであろう。「柳樽」時代には、もう公定の比価で銀六十匁一兩となつていた。

このように、金額を詠んだ句は後世になると、意味や感じが分りにくく、結局「生命」のある句とはいえないと思うのであるが、どうであらうか。

一万円フンといつて草に寝る 路郎

この句の一万円は、現在でいえば一千万円といひ直すべきではあるまいか。路郎先生の青年時代の志を詠まれたものであるから……今、この句を読んで、今日の一万円札と考へるならこの句の意味は逆になつてしま

「一ンち違いで廿円が死んでしまった 路郎  
この「廿円」は、現在のいくらほどに当るの  
であろうか。恐らく「廿円金貨」のあった頃  
の句ではなかるうか。

ともかく経済成長とは別に、インフレとい  
うものは避けられぬものらしい。また私自身  
のことをいって恐縮だが、物心ついて以来の  
物価の値上りはすさまじい。ハガキ一枚一銭  
五厘だったのが現在七円になり、また来年二  
月には十円になろうとしている。ビールは学  
生時代六十銭だったのが、現在百四十円、旅  
館などでは二百円もする。学生時代白浜へ旅  
行した時

宿賃を二割値切ってビール飲む 春 巢

という句を作った。当時宿賃は三円だっ  
た。学生は汽車も二割引きだった。三円の宿  
賃を、学生だからということで二割引きさせ

## 偶然に

### 高 鷲 亜 鈍

偶然に生くる運命は罪と罰

シェストフの不安な顔がもどつて来

ニイチェの鍵はモラルを開放する

米・ソの谷間に山蛭族

活かされて生きて屁をひり詩をつくる

抵抗のなきペンタコを歯で撚る

ひとすべの菓ではあるが詩につよく生きた公

石は石土は土のままで良い

て、その六十銭でビールを飲んだのである。  
宿賃の二割が丁度ビール一本分になったこと  
に興味があって句にしたのであるが、現在で  
は何のことか全く分らぬであらう。

「川柳雑誌」の昭和二十四年四月号に「金  
銭を詠んだ川柳について」という座談会記事  
が載っている。戦後、特にインフレの激しか  
った時期であるが、現在でもインフレの激し  
さには変りはない。その中で前出の

一万円フフンと云って草に寝る 路 郎

の句も引かれて、一万円は「百万円」と取ら  
なければ意味が通じないだろう、と話されて  
いる。また

名乗り出た百万円を読んで寝る 一 球

という句も引かれている。宝くじの百万円で  
ある。二十四年当時百万円の宝くじは値打ち  
があった。その宝くじも五百万円、七百万円

公は逝くひろいひろいたかいたか無限の地  
道はるか仕遂げることのない詩集

海陸も生物も数多星の一つの地球のしくみ

月面へ世紀の草鞋遺棄される

白銀の遷都を決める盆の月

純水の花咲かんかな血と氷

霊肉は合掌にあり裸の男女

永却も瞬間もエクスタシーの境地

愛すれば固くなり且つ繋る

花ならぬ身の華散る日の嗚咽

闇を告ぐペテロ悲しく跪くま

河童同士神も仏もないものか

と値上げされて、現在では一千万円になっ  
ている。路郎先生の「一千万円」も二十四年当時  
の百万円から現在は「一千万円」に読み替え  
るべきだと思う。しかし句の中に出て来る金  
額を現在の額に読み替えただけでは、本当の  
その句の味は死んでしまうと思うのである。

生酔いが七〇円を待って乗り 生々庵

という句も、発表された当時は感心した句で  
あるが、現在ではもう七〇円タクシーとい  
うのはない。百三十円を二百円に値上げ申請中  
だといふから、この句もそのうちに句意が分  
らなくなるであらう。要するに、物価を読み  
込んだ句は、後世になると一般人には何のこ  
とか分らぬ句になってしまう恐れが多分にあ  
る。そのくせ発表された時はやんやとほめら  
れる。こんな句に「生命」があるといえるで  
あらうか。

黄銅六角ボールトナット

及び特殊換物全般

合資 西出螺子製作所

大阪市天王寺区空堀町八番地

TEL 760 三四五二一四

夜間 762 四四〇八

同人吟

## 秀句鑑賞

——前月号から——

### 菊沢小松園

心ない人から知った二号の子

山川 阿茶

この心ない人々の如何に多いことか。一片の好奇心から人の心に取返し附かぬ暗い傷痕を残すことをこの人達は考えても見ない、子は親を撰んで生れては来ない。親に問題はあつても子供に何の罪があるか。胸を張れよ！二号の子。

南無大師妻のこのみ祈りたり

堀江 正朗

夫婦愛の真髄を見せられた句。混り気のないう人間性の美しさに敬服の他ない、此の上はただ神仏の加護よろしく病妻芳子さんの回復を祈らう。

ピエロにもなるう貴方が望むなら

野坂 つき子

自信に満ちた句の姿はさすがに若さが溢れている。このピエロ決して歎きのピエロではない。幸せに踊る喜びのピエロで無ければなら

らない。

腹巻きにどっさり入れてのたれ死

吉田 圭井堂

このユーモアの深刻さに、笑いを越えたある哀れさを感じる。合理性の中の不合理性が面白く出ている。

ポロポロにしといて沖繩身請けする

不二田 一三夫

うまいと思った。さすがにユーモアとペーソスを心得た、好作家の面目躍如。願わくはこの句が佐藤さんの目に触れたらとおもうや切。

馬鹿笑いして溜息を消してやり

木山 遠二

泣きたい時に泣き笑いたい時に笑える人は仕合せである。可笑しくもない時に大笑して歎きを消す。やり切れない人情の世界の苦しさ、笑いの中の目に見えない涙を見せられている、不幸は何処にでも渦巻いている。喜劇でなくて悲劇である。

どうなるでもないを承知で逢いに行

き

志賀 木石

この境地は誰もが感じ誰もが想像し得られる処である。煩惱の犬追えども去らず弱い人間の一面をついている。

年輪ののらりくらりと丸められ

小砂 白汀

のらりくらりの中年輪の触手は動く、年寄の経験と図太さを軽く的確に表現したところにこの人の老巧さを見た。

今日だけはネジ巻かれても踊るまい

岩田 美代

毎日毎日ネジを巻かれただけスケジュールに従って動かされている、せめて今日だけは自由に振舞いたい。たとえネジを巻かれても果敢ない庶民の抵抗か。

遺言を書きなのおす程長生きし

小野 克枝

寿命が延びてこんなことも方々で起るだろう、貨幣単位の上昇で慌てて遺言状を書きなのおす人もあるとか、ある人にはナンセンスでも本人には至って真面目な話ではある。

悪名を売って小善疑われ

島居 百酒

小さくても善行は賞讃されてもよいもの、人間の小心さは事更に過去をあさり、片面を探って小心に鬚りを附けようとする。こうして行為が自分に逆目に出ることも知らずに。

神近き心はあれど淡い霧

川村 好郎

神の心でなくそれに近いところとは人間が想像した範囲の最も自分勝手に決めた上昇したところである。その浄らかさも時があればチャンスがあればそが人間、淡い霧とは、いみじくも言い得しと思う。さすがは年輪は争えないと思つたことである。

近作柳樽

# 秀句鑑賞

— 前月号から —

西尾 栞

手折られて床で咲きたい花の私語

木村 弥栄子

手折られた花のささやきが、擬人法でうまく表現されています。勿論床は床の間の略ではありますが、トコという語感が色々にとられやすいので、字余りでも床の間で咲きたいと詠みたい。

葉桜よこのすばらしい息づかい

錦織 文子

このすばらしい息づかいという、すばらしい言葉で、むんむんする新緑の中にひきこまれました。

春つらら飲み込む河馬の大あくび

荒木 鶴翠

故人の路生先生は動物の句が非常にうまか

ったが、先生に負けないこの句はうまい。春うららは上五で別だな、そして飲み込むのは矢張り春うららだな、それで河馬の大あくびが益々大きくなるんだな。

春の風ちゅうぶらりんの僕である

竹崎 寛

春風の中に立つ自分を、ちゅうぶらりんとは面白く表現されました。川柳には川柳ならではの言葉があつて、之を表現し得た時の嬉しさは格別で、川柳はやめられぬものです。

小紋着こなし美しき五十代

堀口 欣一

作者のキャリアは熟知しているから、今更うまいの上手のと言うのもおかしいが、年期はおそろしい。

今日を耐えよう空の青海の青  
真青な海に悲しみ断たれそう

大峠 可動

羽曳野市とあるから又句想から、目下療養中の方とお見受けする。耐えようとか、断たれそうとかの固い言葉だが、幅広い川柳として、句想から言って止むを得ない表現だ。

マニキュアの掌を合せてる島通路

大本 バット

同行二人の笠を着た通路さんのイメージは今では、通路もリクレーションになっているので、通路する人の爪がマニキュアされているのも不思議でないけれども、通路という姿とマニキュアの対照が川柳人は見逃さなかつた。

その他の秀句

ボケットの握り拳よ明日がある

中年の重みで朝の靴を穿く

わがままな人さ涙もとりあげた

うすい胸ばかり来よるとレントゲン

夫婦とは死ぬまでわかないクイズ

海底の神秘に憑かれたアクアラン

千代香

静香

力

比呂路

千寿子

鶴声

色紙短冊  
書画用品

大塚がびしる

丹青堂

マニキュア

# 七人の敵

石原青竜刀

偶然ということはおもしろい。二、三日前テレビのクイズ番組に「男が外に出れば何人の敵がありますか」というのが出た。「七人」と正確に答えたのがプロレスラーの大男で微笑させられた。と、近着の「川柳塔」七月号の作品を読んでいるうちに

七人の敵へネククイ締めて出る

(吉岡美房)

という句にぶっつかってハテナ?と首をかしげた。どうも見たような句だと思って、メモを繰ってみると「北上」71年5月号に

七人の敵へネククイ柄を撰る

(新井栄太郎)

というのがあった。この句はよく「今日の川柳」について「大法輪」70年12月号に書いた文章に引用して推奨したもの一つである。比べてみるとやはり「締めて出る」はナマであり「柄を撰る」の的確なリアリズムの具象性が抜群である。願わくば表現研究の

上の参考とされたいと思う。

ところで、この「七人の敵」という文句は川柳の句語としてちょっとおもしろいので、これからもこれを使って作者の新しいアイデアの発見により作品化を試みられてよいと思う。これまで、多くの乏しい資料メモからは右の他は次の二句しか見つからない。(ただし戦後のもの)

①七人の敵の一つにパチンコ屋

(番傘58年2月 長尾渺々子)

②七人の敵そんなに少ないはずがなし

(えつびつ60年10月 日向秀史)

①は軽い人間諷刺で、いささか「七人の敵」のウエイトに庄されたきらいがないでもないが、今日の川柳に乏しい「笑い」がある。パチンコでなくても馬券でもホステスでもあてはまるだろうが、パチンコ屋は川柳的感覚としていちばん的確である。

②は古川柳によくある「成語に対する抗議

的ウガチ」の一種(例えば「無理ないけんはたましいを入れかえろ……柳多留二四」)に類する「理詰め」が川柳文芸としての味を稀薄にしているが、現代世相の苛烈さを諷しているとも考えられ、やはりすてがたいものがある。

好きな作品

私の器から

(うつわ)

森下冬青

川柳塔社の主幹、中島生々庵氏が選にあたっていられる川柳塔作品を、全部読み味わい何か文にしたいと思いつつ、何分にも五百以上の作品を、一句一句読み味わうのは、時間と根気がいるので、ついやれなかった。

ところで、今度こそはの心にもなり、六月号を開き川柳塔作品を、全部目を通し、私なりに味わった文を書いてみたい。

一口に作品を味わうと、言っても誰しもだろうが、私には私の川柳作句の経験からくる私の作品傾向をもっている。その作品傾向に

溶け合わない作品は、好みとしないと思う。そんなハンディキャップで、川柳塔作品を読む味わうことは、実は狭い世界の味わい方になるをおゆるし願いたい。

もう一つ言いたいのは、六月号の作品を出句してられるのは、百三十人であった。その百三十人の作家の内、たったお二人だけ、見知りの方で、あと百二十八人は、全々見知らぬ方たちの作品を味わうことの難かしさである。

考え方に依り、全々見知らぬ方たちの作品を味わうのは、責任が無くて楽なような説もあるけれど、人それぞれに生活のあり方、思想、個性とやっかいなものが一句の作品を生んだ作者の作品の命を考えると、それを知らなくて作品を味わうのは怖いこともある。ともあれ私なりの味わいの世界を色々悩みながら、楽しみながらペンを動かしてゆこう。

あんたかてうちから阿呆で仲直り 天笑  
この作品に、ぶつかり川柳塔の前身、川柳雑誌の、昭和の一茶とも云われた、今は亡き須崎豆秋さんが、私の頭にひらめいた。所謂そこ抜けの人間の良さが、対話形式にして、読者へ楽に味わい、それでいて、深い内容がくみとり方により、答えがあるからでもある。

「もうかりまっか」の商人根性から、阿呆な人間性と悟ることは、この世にらちあかぬという自覚のもとに、阿呆と悟れるのだと私はそう信じている。本当に阿呆な夫婦の仲直

りであってほしい。

本心を書けて出してはならぬ文 君子

作品が好きだとか、嫌いだとかの前にこの作品の発想にグウとひつかかった。人間社会に生るうえに入むつかしい娑婆には、からみつきがある。故に本心をぶちまけて、さらけ出せない場合がとても多い。「本心を書けて」の涼々しさ、本人の満足そうな顔がみえるようでもある。さわさりながら、さりながらと、思案をしている風景も観えるのに、好きになった。平凡な着想でありながら、妙にひきつけるものがあるのは、どうした訳だろう。

熱帯魚あばれた奴から先に死に 小松園

川柳作家は、こまやかな人情の世界を穿つのはうまい。これは反対の非情な内容を含みとしている。と、ここまで書いて、まて暫しの心になった。

川柳は社会への教訓のために、作られるのでもないが、川柳作品から、教訓を感じるのは、勝手次第である。硝子張りの中の沢山の熱帯魚の動きを眺め、人間社会も生きるうえに、かくやとも観えてくる。間違っていないかな……。

毛沢東も贅え自由も捨てきれず 一保

この作品は、百三十人の作家の内、只一人毛なみが異なる。つまり毛沢東語録を読み、あるいは社会主義思想も、毎日の生活にあつて染みみついている。という作想を作品から読みとれた。

かじかんた手で喪章をつけてやり 新之助

茶柱に触れずお通夜の茶をよばれ 好郎

前者は人間の悲しみを一本通し矢で詠み、後者は、茶柱が立つたのは縁起がよいと、日常平和なときよく言う。そうした心をおさえ、通夜の茶をよばれている姿、心が浮き彫りになっている。十七音子の業をたくみに表現したうまさがある。

浜育ち波の機嫌を知りつくし 恵二朗

「波の機嫌」という擬人法的手法に、浜育ちが、とても生きています。宿命的な人間の場の育ちは、喜びも悲しみも、波の機嫌を知りつくした、そこに浜育ちの人間像があるう。

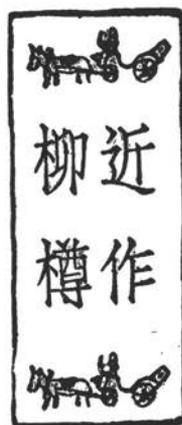
春風にひびく心の糸が鳴る 野迷路

野仏を残して過疎の空が澄み 布堂  
春風に、の作品から、詩的なものが感じしてくる。過疎の空が澄み、からは、過疎にならない先きは、野仏は拜まれていた筈である。残された野仏さまは

「みんな倅わせになつてくれ」

こう仰せを想像している。「空が澄み」に私は秋晴れを想像したが、作者はどんな季節を背景として作品化されたのだろうか。

十七音字という、最短圧縮文芸は、ともすると、単に説明だけで終る時は多い。そうなるど駄句の世界へ入る。本当に十七音字という宿命的な世界を詠むことは、とてもむづかしいものだとは私は常日頃そう想っている。川柳塔作品から、九作品を好きなものとして頂戴した。でも、それは私の器の中で味わっているのだから、その点を勤べん願いたい



川村好郎選

岡山県 嘉 数 千代香

その風にテンポを合わす風車

振る旗もない父さんのちびた靴

今日と云う滴しっかと握りしめ

その先きは知らず刹那の流れ星

第三者の方が堪えられない罵倒

島根県 堀 江 芳 子

病めばなお夫婦のぬくみ子のぬくみ

こわれ物のように退院とり巻かれ

命ひき戻しぼつぼつ欲が出る

桐下駄を鳴らしてみたい病みあがり

いい着物欲しくないとき女病む

島根県 榊 原 秀 子

み仏も新家嬉しい香にむせび

梅雨晴れへ庭師の袂よく響き

悩みごと夫の脊巾が受けてくれ

性格ヘメスを入れた日焦せり  
ドライフラワー女一人の愚痴もきき

大阪市 河原林比呂路

嘘ついた欠席見舞来てばれる

籠の鳥あきらめきって空を見ず

ミニマキン漫画のように見る明治

余るのにまだ米輸入する不思議

小商人昨日の損はもう忘れ

鳥取市 有田鹿の子

新緑の春幾度の香に浸り

病夫にもせめて見せたい山の春

記念樹の育ちを遠い子と思ひ

父と子のうつる川面の空青い

今日までの命と知らず海老は跳ね

羽咋市 三宅ろ亭

急がない便り速達で驚かせ

戸を開けるネコ生活の知恵もあり  
夏休み民宿のように家族増え

定山溪元気でずわと妻電話

ニコチンとタールを吸って今日も無事

大阪市 河野幸子

心まで見透すようにようすり

謙遜したつもり自慢にとられてた

笑っては見たが妬心かくされず

あじさいのように心は移りだし

意味のある微笑とっさに下を向く

今治市 原田輝親

本心を隠す刺繍の針を刺す

流れざる河を心の底に持ち

夕焼の燃えて褪せゆく心もつ

太陽に透かして恥じる手の汚れ

夜の鏡心の修羅を写し出し

竹原市 三宅不朽

蝶高く低く墓碑と語ること

病む果ての葬も雨雲たれし中

表情が闇夜にもあり螢とぶ

こころに灯ともさんとして金魚買う

鳥取県 両川洋々

運のいい苗は陛下の手で植わり

金でカタつけに来たのが気に入らず  
乗れば衝突歩けば轢かれる世に生まれ

はねたのもはねられたのも酔うており

尼崎市 中谷利美

これ以上問えば無能とうたがわれ

課長ともなれば好きでもないゴルフ

甘えてるつもりが母をこき使い

子は宝だとは言えない半ダース

大阪市 阪上十止庵

ミニの膝蔽いて若さこぼすまじ

ひと眠りしたら小さな欲だった

現役のまままで死ぬ気か老いの汗

電車待つひまに腹立つ記事も読む

大洲市 堀内曉風

苗代の出来減反にかかわらず

成り行きは何うなるうとも僕は僕

無理通す意識の中の高笑い

満ち足りた余生に好きな酒もあり

富田林市 木村弥栄子

冬眠もあって開ける道もあり

人命を所得のサジで計られる

憤る心に黒い疲労感

電化へと額に汗して暇を買う

島根県 東原福子

朝風に湖がボルガを踊る窓

道端の花に抵抗なき無常  
人を恋う胸のつづみの澄みし音

葉桜が池の金魚に影を添え

松原市 守屋万竿

マイナスと知っても後へひかず老い

後編は白黒にしてわがドラマ

肩書きの前の字フルに振りまわし

もめにもめ挙句前例物を云い

大阪市 竹田一世

指輪した手の方ばかりよく使い

ムード派はおぼろ月夜にプロポーズ

只一人をよう選ばずにまだ独身

投票日やっと静かな朝となり

東京都 宮崎美津子

スモッグに耐えた並木のさくらんぼ

朝の駅一人駆けるとみんな駆け

ふと触れてとまどう息子の堅い掌

丹精のバラみんな見てと叫びたい

大阪市 大住文子

廻り道して来た果てで幸に逢う

百合咲いて雨の夜なべをねぎらわれ

言葉だけゆき届きたる席に居る

結び目かとけず悩みの殻ぬげぬ

竹原市 楠貞子

素直さに返れば相手から折れる

詫びる心になって詫びる人が居ず

海に明け海に暮れ海の詩は知らず

添う心添いたい心傘の中

大阪市 黒田真砂

娘が嫁ぐ迄をせめてと派手な柄

苦労した話子供は生あくび

ボーリングゴルフ気だけは若い母

胃検査

胃炎だと言われ深々頭下げ

橿原市 岩井本蔭棒

一月も先の挨拶気にかかり

安楽なお迎えだけが欲という

産声へもう保険屋の早い耳

ここに来て誰に入れたる投票紙

大阪市 今西寿子

後輩の失敗笑って励ませる

夫と子に微笑の限りわけ与え

自慢話劣等感から出たと見る

選ぶ人みんな母親気に入らず

大阪市 沼節子

傘一つ三千院は緑雨

忘却をうながすように風の鳴る

振りかえる弱さも知った夜の雲

冒険をする気髪型変えて出る

八尾市 高杉力

苦を楽にかえる欺瞞が許せない

ふと君に逢うかも知れぬ街の角

夢分けた二人は過去を語らない

エリートと呼ばれ暮しにわくが出来

大阪市 小 谷 葉 子

船先変えて愛の構図をぬりかえる

愛の鍵別れの鍵を人は持ち

夢追うて花咲かぬまま石女

ビニールハウス洩れる倅せのバラ一輪

八尾市 高 杉 千 歩

すぐそこにうぐいすの来て雨の宿

霧に声が激んでる別れの言葉

うらを返せば自分可愛いだけの人

遺句 東大阪市 坂 上 山 椒 坊

長女結婚

御先祖の別れもそこそこハネムーン

尻にしく顔には見えぬ角かくし

空箱も添えて娘の荷を飾り

大阪市 柳 原 静 香

老いて行くわが歳月を孫が埋め

耳のない私ペンを頼りきり

聴えない身へ後にも眼がほしい

大東市 荒 木 鶴 翠

裏方にスポットライトの灯が遠い

今握手した手でそろばんはじいてる

俺の影パントマイムでついて来る

新潟県 高 野 不 二

叩かれて少しはもてたつもりで居

ロケットの予算数えて見る庶民

ねずみ講脱税

差押えられても人の金ばかり

羽曳野市 麻 野 幽 玄

再会の盃溢れる程に酌ぎ

釣り上げてどうするでない糸を垂れ

良縁と乗り気へ別居云い出され

島根県 錦 織 文 子

巢を守る親蜂の枝摘み残し

衣替え心の季節も整理する

苛らだつ日聞えぬ耳も持って居り

松江市 興 富 喜 子

宮仕えやめて曜日のないくらし

お隣りも停年らしくいらしむき

一票を握手に托す参院選

大阪市 岡 本 まさひろ

到来を首実験の型であけ

来ねば来い来れば早う去ね嫁った娘よ

なぐって気が済んだがあとが高くつき

幸福のレール初老へまだ続き 愛媛県 小 山 悠 泉

ひねくれた胡瓜は山にして売られ

死ぬ時と一緒に妻葬式から戻り

大阪市 西 本 保 夫

妻とただ二人週休二日制

あっざりとミスを認めて平社員

すらすらとインクの出る日平社員

愛媛県 小笠原 仲美

巡り合い触れてはならぬ事がある

始業ベルに僕の時間を切り取られ

口数の少い夕餉母が留守

鳥取県 鈴木 村 諷子

早乙女のだぼらなつかし機械植

恩の種蒔いて有事にそなえとく

豆売りの老婆フツと来なくなり

羽曳野市 今井 岳 太

回廊を歩みて奈良の恋静か

空焦げているに冷えてゆく恋か

井の中の蛙の顔で聞いている

新宮市 川上 久 司

お守に値段の違うありがたさ

初対面気が合いそうな眼が笑い

逆立をして方向見失ない

寝屋川市 福富 隆 子

内職の百までの数くり返す

半ぼけの私にセールスを押し

奥さんはお留守ですかに口合わせ

和歌山県 熊野 溪 水

よい空気お金を出して吸いに行き

舌戦に公害いつでもカモにされ  
惜別の余韻残さぬ汽車の窓

島根県 中島 英子

連休の雨が財布を落ちつかせ

体験を派手に語れば自慢めき

手ぶらでは済まぬ恩師へ遠ざかり

松山市 谷 のぶお

集金へ持って行きます持って来ず

老人の過去背中にしがみつ

中位とは寛大な自己評価

島根県 谷岡 芳 枝

みどり風リフトあやつり明日の詩

アベックを妬くか三瓶の風当り

姫逃の池にて

アベックへ悲恋の池も考える

島根県 榎みどり

平凡にさからうような現代っ子

かがり火を真赤にもやすシクラメン

片言で幼児せい一っぱいの自己主張

大阪市 堀口 欣一

宗教の時間寝床で聞いている

稽古事婦唱夫随という姿

往年のベストセラーの店曝し

和歌山県 檜村 ふみよ

聞く方へまわれれば退屈するお客  
尼寺の花気がねなく赤く咲き  
餌あさりの出来ぬ雀と雨宿り

島根県 安 達 潮 音

孫のない吾が家へ虚し五月空  
うさ捨てに垂れた釣り糸魚がひく  
すえかねる腹も齡がじつとすえ

大和郡山市 森 田 カズエ

小説のような過去もつ女無口  
どんぶり勘定それで家計簿合ってます  
億円の借金えらい奴と云い

備前市 武 内 雅 堂

一瞬の命へ蠅がしがみつき  
断腸の思いを雨がたたきつけ  
妻と子の願いを朝の床で聞き

藤井寺市 古 結 百 水

怒鳴られたついでに女房のアラ言われ  
しみ一つどう塗ってみても梅雨の壁  
寝込まれて糠味噌箸でかきまぜる

青森県 岩 淵 一 星

年下の死に儲かったなと思ひ  
五ツ珠若い課長にけむがられ  
勝っているパチンコ負けたのが覗き

島根県 大 森 孝 華

オセンチにさせてホタル闇へ消え

参詣へ手ぶらとわかる身の軽さ  
短命を知るや暮色へホタル舞い

和歌山県 ふきあげ 虎 城

忌わしい想い出冷凍しておこう  
コンピューターが縁で並んだ指定席  
宝石も偽せ女もにせものの夜

鳥取市 藤 本 鎮 也

失恋もマンガのようなら素晴らしい  
交通禍地獄の一丁目に戻り  
頑張るぞ嫁もきまった僕の春

今治市 大 本 バ ッ ト

思い出の母校壊され建つ団地  
腹立ちのやり場生垣刈り過ぎた  
目の毒と目の正月と展示会

今治市 伊 藤 一 郎

段の値で買った農地を坪で売り  
病身の生まれか人を恋ひ慕い  
争いのしこり黙って毒食べ

今治市 今 井 松 花

叩き潰された残りが民芸館  
ブラジャーと同居しているニキビとり  
蓬菜に立たせたいよな父になり

今治市 古 野 伶 人

公園の木が茂ったら恋の宿  
愛犬の機嫌任せの散歩道

渾心の力で孔雀羽根揚げ

呉市 植田英詩

もう白髪恥ずかしくない齢になり

子が三人ある身を母は不安がり

守口市 岸本豊平次

顔色はこちらの心読んでいる

馬鹿になる者がいて家の丸くなり

岡山県 山田止水

こぼれ米拾う心を忘れかけ

老妻へ明治の男荷を持たせ

大阪市 藤田頂留子

うらめしい雨足客足を遠ざける

不機嫌を梅雨空にして取り合わず

河内長野市 井上喜醉

評判を聞いて患者になりにいき

借金を返した途端に態度変え

竹原市 生信笑子

さっそうと歩くバッグ開いていた

夕陽しずみぬ過去は美しいものとして

河内長野市 森本黒天子

栄転は高嶺の花へ手を延ばし

若人に負けまいマイクでしぼる声

笠岡市 山本柏生

路地奥へ頼むマイクの声かすれ

なごやかな夕飯時に客が来る

七尾市 松高秀峰

素直さがなくて盆栽喜ばれ  
気前よく飲ませ次回は出馬らし

小松市 村井城南

こうだからいやだと年寄憎まれる  
妥協するつもりじゃなかった酔うた足

羽曳野市 大峠可動

美しく詠もう農婦の夏の顔

母と子のパイプを磨く灯へ帰る

鳥取市 山形春海

妻の座の苦勞へみどりの風よ吹け  
新緑は明治のままの過疎の村

竹原市 簗田浄美

立関のここの花にも夏の色

大切にしたい炎を消されかけ

大阪市 藤本正美

夢の世や愛の心は花隠れ

人権も下請け機関で扱われ

鳥取市 近藤秋星

耳鳴りが伴奏のよう夜半に覚め

四日後に田植えひかえた静けさよ

鳥取県 林霧杖

控え目な妻の助言に扶けられ

手土産の効き目をじっと待っている

和歌山市 島本泰子

一人暮し羨む友の何思う  
干ぶとんふくらみ夢路へすぐさそい

岡山県 武元柳子

いつまでも母はよいものかしわ餅  
白百合に別離のころあふれてき

新宮市 小山峻

決断がにぶり又株売りそこね  
人生の疲れ胸打つ呼吸音

米子市 石垣花子

発展と云う切札で立のかせ  
厄年を笑い飛して事故にあい

香川県 西山綾子

中性の女房の酌で酔うてくれ  
鼻紙のような借用証を貰い

東大阪市 落合思月

企みを秘めて二つ返事なり  
一人立ち二人帰ってみんな去に

宿毛市 山本窓花

染め変えて着ても思ひ出は残り  
なつメロを聞いて過去をたぐり寄せ

大阪市 平井露芳

放たれた螢に捕虜と死とが待ち  
放たれた螢ににがい水ばかり

高知市 竹崎寛

生き甲斐は銭っ子ですトゲ咲かず

銭っこになぶられそうにいる女

守口市 野呂杜月

その門出バラが祝福して赤い  
梅雨よ降れ降れ公害を流すまで

堺市 栗本藤持

意地出して投資したが四苦八苦  
へそ曲り同士でいつもよい相手

守口市 樋口一峯

俺だけは死なぬつもりのをきき  
年寄りに酷とも見える歩道橋

大和郡山市 森田カズエ

動揺を隠す仮面をはずさない  
魚の目を切ろうか雨の公休日

和歌山市 増田めぐみ

雑念の私白鳥にある無心  
他人は他人私は私薔薇牡丹

仙台市 川村映輝

酒飲めぬようになって又案じ  
減反を余儀なくさせた冷霜害

青森県 波ただお

これでもかこれでもかとミニ・ホット  
香典の厚い袋で情知る

今治市 真山国彦

此の次の化粧に臍がねらわれる  
凡人に読めぬ字それが芸術か

和歌山市 垂井千寿子

しゃべりつつ目は海峽の緑追う

美しいトゲはやりわり刺してくる

高槻市 山田スミ子

感情をむき出しにして笑われる

お隣の暮しの派手を話合い

愛媛県 渡辺都留逸

欲求不満の高い頬骨

馬鹿正直にすぎた術策

鳥取市 藤本恵子

宿直の火鉢するめを焼く匂い

制服を着てBGの顔になり

鳥取市 藤本佳女

眼帯のとれた日青葉が目目に泌みる

虫干しへ亡夫の軍服嗅いで見る

大阪市 本間満津子

毒舌の蔭に友情確める

病人に見舞いの人が励まされ

大阪市 木村濁水

日落ちてても子らは遊びの輪を解かず

古稀迎え柳に風の心なり

大阪市 今井隼人

年寄も折れて朝だけパンにする

掛け声のように出来ない年のせい

大阪市 花田繁子

老友と恋仲のような別れよう

若さとはお太鼓の帯苦にもせず

柴転も悲し一人っ子にほっとかれ

泉佐野市 大工静子

星空が聞いているふたりきりの夢

松原市 玉置迷朗

子のプラン親のふところ当てにして

大阪市 塩満敏

制服をぬいでいつもの母になり

鳥取市 藤本和宏

他人ではきたなき家も安住の地

大阪市 木村久子

花見酒日頃の苦勞うち忘れ

大阪市 村島秀村

・ 近 詠 ・

長野県 高峰柳児  
春闘の五桁へ家計簿尻を押し  
生き甲斐を支える明治生れの軍歌  
敗北を嘯みしめ卑屈の弁へ折れ

大洲市 米沢 曉明  
コップ酒昔の職をなつかしむ  
苗床のここに早くも優良可

今治市 月原 宵明  
偽装解く日退職金貰い  
和服きるたしなみならず医者通い  
南部風鈴わが家の椽へ腰かける  
和歌山市 秋 月 宏 方  
働けとお日さま雪を追い払い

松島にて

島の名をガイドまちがうかも知れず

名古屋市 長谷川 鮮山  
最悪の場合どうするかと訊かれ  
来年もこのメンバーで来る予約

岐阜市 市川 鱗魚  
氏よりは育ちに氏の血が目立ち  
夏なれどミニは少こうし無理な齡

今治市 長野 文庫  
しあわせを売ると保険の名文句  
腹の立つ奉公袋だが捨てず  
山紫水明見ると住むとは大違い  
小松市 山 上 千太郎  
野の仏四季のうつりの顔でいる  
いま鳴いた蛙公害を生き残り

# 白柳遺句集発刊のこと

西尾 栞

白柳さんの歿くなられたのは、秋もようやく深む昨年十一月でありました。お家の周りは空地が多く、秋の虫がふるように鳴いていました。それでなくても淋しい秋の夜を、七日、七日の鐘の音が虫の声とともに、わびしく、冷たく夜の闇に消えてゆきました。

それからのち、白柳追悼句会が、本社を初め、塚、富田林、または各地方の句会でも数えきれないほど催されました。また関西西川柳懇話会も尼崎労働会館で、京都、神戸、大阪の人達によって、あのにこやかな写真を正面にまつて、有りし日の白柳さんの人柄を語り、エピソードを語りあい、白柳さんを偲ぶ句会が開催されました。

こんなに慕われ、こんなに惜しまれた、白柳さんの遺句集が一日も早く発刊されるようにと皆さんが待ちこがれてくださいました。それで発行はちょうど路郎先生の七回忌の川柳大会を別途にと、委員の者が努力してまいりました。そしてやっと間に合うことが出来

ました。これは故人の草葉の蔭からの導きと深く感謝している次第でございます。

製本の出来たのは、七月四日の日曜日でありましたが、日曜日でも必らずとりに行くからその段取を頼んでおきました。ちょうどその日は堺川柳会、若芽川柳会、菜の花句会の合同吟行句会でありましたので、句会場の大阪府泉北考古資料館を三時半に、河内天笑君の車で大急ぎで出発して製本屋に駆けつけました。

浅緑の帙に入った、清水白柳遺句集と銀で打たれた背文字の本を見た時は、摩天郎、小松園、天笑と私の四人は思わず顔を合せて、泣きたいような嬉しさで一杯でありました。

積荷も、もどかしく早速清水家へと運びこみました。先ず一冊を仏前にお供え致しまして香をあげ、鐘をたたきまして暫し、瞑目合掌致しました時は、一と目の句集を、白柳さんに見せたかった、手にさせたかったと、傍にいられる奥さんと、列座している四人は、

美しい心

美しい花

富田林 公栄社 (07212) 2064

言わず語らず同じ思いで、暗然と致しました。

生前既に句集刊行の下準備をしておられたので、あるところはスムーズにゆきました。ところが却って、むずかしいところもありました。おそらく白柳さんの意図と合わぬところも出来まして、俺やったら(生前彼は俺という

言葉を連発しました、なつかしいことばです)俺やったらこうすると言うと、何だか叱られました。が、六百句に余る白柳氏独特の佳句秀吟でもって、私達の努力の到らぬところを埋め合せて戴きたいと思えます。遺句集でございますので、渋い色の表紙にいたしました。そのかわりに銀で文字を打ちこみました。なおこの句集の刊行にあたりまして、御遺族の方達が、大層意欲的に御協力下さいましたことを、茲に深く感謝申し上げます。

最後に、嗣子健司君の句

口元へそつと水やる母を見る

をかかげまして、筆を擱きます。が一冊でも多くこの遺句集をお求め下さいまして、白柳さんを偲ぶと同時に、句の勉強にしたいだくことをお願いする次第であります。

# 白柳二二に 生きてゐる

菊沢小松園

昨年白柳が死ぬ前に岩本雀踊子、魚住満潮とそれに私と四人で長谷の牡丹でも久し振りにゆつくり見に行こうと誘われて、例の世話好きで、電話やらハガキやらで連絡してよいよ決行するようになったが都合で一週間延期することになった。その間に第一回の心筋梗塞が起きてそのまま行かれぬようになり、ついに不帰の客となった。

何だかこのままでは後味の悪いことで、白柳に借りがあるようでどうも気になり、去る五月九日の日曜日、白柳の亡い三人の旧友で長谷寺へ出掛けた。話題も終始、故人の思い出話がつぎからつきへ、何しろ三人共二十才になるやならずの頃からの柳友で、お互いに嫁はんより前からやと笑い合った。白柳がいてたらなあーと、何べんも同じ処に言葉は落ちる。おのおの心の中に白柳は生き続けている。声も、姿も、顔も、匂も、ああ白柳はここに生きてゐる。

長谷寺の牡丹詠草 小松園  
媚びに疲かれ牡丹がっくり傾きぬ

指先でつつけば緋牡丹こちら向き  
かかる世に何の不安も咲く牡丹  
咲き切った牡丹へ遠慮のないカメラ  
傾いた牡丹めしへ雄蕊の敵とあり

## ★菜の花納涼句会吟行

日時 八月二十二日(日) 十時。

(上六改札口集合、山本駅のりかえ、信貴山下車、信貴山上ケーブル)

会場 信貴高原ホテル(電話〇七四、五七二、四七〇一番) 一時開会

題一高原・ホテル・すずき・風・ケーブル。

会費 八百円(昼食、ビール、入浴費共)  
(交通費自弁)

申込先 〇五八一、八尾市八尾木八一七

西尾 栞宛

## ▼堺・若芽合同川柳句会

八月十三日午後六時、摩太郎宅。兼題一早合

点・胸・走る。

堺市農協出題(農協情報掲載)「肥料」

堺市九間町東二丁一の七、八木摩太郎宛。

▼南海川柳会(ナンパ高架下、親和クラブ)

八月十九日兼題一各停・十割・ひじ鉄。

▼南大阪川柳会(松崎町二丁目、以和貴荘)

八月二十日(金)午後六時。兼題一秘密・職場・コント・火花。

▼直原玉青先生指導「第10回青玲社余技日本

画展」が6月15日と20日まで阪急百貨店七階

で開催された。生々庵主幹の「朝」小石女士

の「春」「秋」岸本豊平次氏の「萌春」など

好評。

## 栞句集「水鶏笛」売り切れ御礼

なお残部少々、西尾栞氏方にあるとのこと。ご注文は大阪府八尾市八尾木八一七へ。

## 榎本聰夢句集

“山の灯” 発行記念川柳大会

とき 昭和46年8月22日(日)正午開場

ところ 堺市民会館大集會室

堺市翁橋町2丁1の1

電堺〇1481番

記念講演

あいさつ 川端直正氏

宿題一訓示・社長・数字・強い・嘘・

知る・愛情・山・灯・遠い。各題2句、

締切午後一時。

会費千円(含句集、記念品、大会誌)

欠席費句はご遠慮ください。(席題なし)

懇親宴 千円、8月15日までにお申込

みください。申込先、〇五九〇堺市櫛屋

町東一丁二の二、堺番傘川柳会。

# 川柳五十三次 (一一)

## 富士野鞍馬

### 18 江尻

江尻は今の清水市である。興津からわずか一里三丁(四・三キロ)で、三保も今は清水市に入っている。この辺の海を有渡(うど)浜と称した。

有度浜で短冊を出す歌行脚 繪巻(二四〇五)という川柳がある。

林道春の「本朝神社考」に、

「三保松原は有渡浜に在り。風土記を按ずるに、古老伝て云く、昔神女有り、天より降り来り、羽衣を松枝に曝す。漁人拾得す。(中略) 神女之を乞ふ。漁人与えず。

(中略) 遂に漁人と夫婦になり(中略)

其後一旦、女羽衣を取り雲に乗って去る

とあり、謡曲「羽衣」には、これを潤色してこの漁夫に伯龍という名をつけて、天女が舞を舞うことになっている。これらの伝説を多く川柳に作られている。

美しい捨物のある三保の松 清水(二八四)

珍らしいひろいものする三保の松

青志(八〇九)

巾布(三九四)

伯良は既に女房にする所

天人も一度人別帳に付き

羽衣をかへさぬうち飯もたき

(拾四一八)

天人へ舞とはかたひゆすりやう

(初一四)

舞うて見せるによこしなと天乙女

(二四一四)

羽衣をてんでん舞でとりかへし

(二四一四)

羽衣をかへしてしまやおさらばえ

(四四一四)

南無三ば女房こくうへ舞上り

鳥友(五〇一三)

羽衣を見失ふまで口を明き

(二八三四)

はくれうは欄間をみると思ひ出し

(拾四一四)

三保には「羽衣の松」というのがあり、御

穂神社には、羽衣の裂端というのが保存されてある。

広重の絵は、久能山から見た三保松原を描

いてある。久能山には徳川家康の本廟、東照

宮がある。川柳は、

御葉は神慮に叶ふ久能山 佃(七三二)

御山より神位の高い久能山 要宜(八九九)

勅額の筆意も高き久能山 普子(二二五)

と詠んでいる。

19 府中

府中は江尻から二里二十七町(一〇・八キロ)

口)。駿府ともいい、現在の静岡市である。

十返舎一九は此処の生れだから「膝栗毛」

の弥次郎兵衛のしるべを府中にこしらえている。

「忠臣蔵」では、大石内蔵助が垣見左内

と偽称して東下りの途中、府中で本物の垣見

と会って、情を受けるところがある。

内蔵助府中の宿で茶のまず

静寿(八四二六)

と川柳に作られている。

徳川家康は、この駿府に隠居していた。そこへ孫竹千代の乳母春日局が、將軍継嗣について、伊勢参りと称して、内密に推参、家康に訴えたので、家康は江戸へ行って、三代將軍は竹千代(家光)と確定したという話は、芝居にもなっている。

駿府の下乗に見覚えぬ女中駕

赤子(二六一二)

表向伊勢で駿河へ抜参り

巨眼(二五一三)

隠密を富士の麓で局いひ

(三〇三二)

駿河から御言葉おもき御順道

迎度(九四七)

駿河細工で竹の世にあそばされ

柳泉(二〇二六)

と詠まれている。  
由井正雪は、浅間(せんげん)山に菊水の

旗を埋めておいて、それを掘り出させた。

菊と水とんだところ掘り出させ

出處(九一三三)

そして陰謀露頭して府中で自殺した。

富士の根方で慶安の雪は消へ

株木(二〇三九)

府中の遊廓二丁町は有名で、一九の「膝栗毛」に

「あべ川弥勒の手前にて、通り筋よりすこし引込みて大門あり。ここにて馬をおり、廓に入つて見るに、両側に軒を並べて、ひきたつすががきの音賑はしく、見世つきのおもむきは、東都の吉原町におほよそ似たり。」

とあり。慶長十四年(一六〇九)鷹匠の伊部勘右衛門が、命をうけて、安倍川のほとりに二町四方の遊廓を開設したのが二丁町で、江戸の吉原より八年早くできたのである。

御隠居所だけに廓も二丁なり 香貞(四三三)

弥勒町仏頂面は売れ残り 巨眼(二一七三)

駿河の名物一富士に二丁まち 早牛(二〇七三)

出處(九七三)

それいかずよからず駿河二丁まち

明八梅(四)

駿河にも二丁子すてる藪があり

明八梅(四)

「いかず、よからず」は駿河の方言である。

安倍川の手前に、名物安倍川餅がある。

まんじゅうは食わず阿倍川餅は食い

(三一三)

安倍川で馬は黄な粉を浴びてゆき

阿倍川で上戸手を出ししかられる (三六拾二五)

素烏(四二四〇)

五文取り下戸阿倍川が明いた口

春風(八〇三)

安倍川の渡しは、宝曆五年(一七五五)の

「東海道巡記」に、

「徒越、重畳満水一番越一人前六十文。水引にたがい下値になる。」

とあるように六十文で、増水すると六十四文であった。

安倍川はしらふ酒匂はよっぱらい

(二六八)

安倍川で人と思はぬふとり肉

(四三二六)

この阿倍川原で、家康十才の時、児童の石合戦を見て、少数組の方が勝つといひあてたという史談がある。

## 20 鞠子

府中から阿倍川を渡って一里半(五・九キロ)で鞠子の宿である。丸子とも書かれている。この名物にとろろ汁がある。広重の絵にも「とろろ汁」の看板が描かれてある。

梅若菜まり子の宿のとろろ汁 芭蕉

と詠まれ、川柳も

阿倍川餅のあとへ食ふとろろ汁

里鳥(二四〇二)

常の汁もるにも鞠子手品する

吉鳥(三三三)

梅さいてまりこへ売れるつくね糺

佃(七九二)

と、とろろ汁を詠んでいる。また、

鞠子から蹴上げたやうな吐月峯

帆布(二四〇一)

鞠子川蹴上げの水が二百町 木質(九一五)

鞠子宿泊り飛鳥井大納言 千之(二四三)

まりこ宿松は柳も御とまり 有華(六五三)

と、鞠蹴にかけた趣向の句も作られている。

吐月峰は、丸子泉谷にある臨濟宗柴屋寺の

側の山で、天文の頃(一五三三―一五五)有名

な連歌師宗長が、齋藤安元に招かれて、この

柴屋寺に住んでいた。寺の庭は宗長の作で名

苑といわれている。ここで竹細工が出来、そ

の灰吹には「吐月峰」と焼印がしてあった。

それで吐月峰と書いて灰吹と読むようになったのである。

朝もやに馬子唄はつむ蹴子宿

錦糸(二二三)

これから宇津の谷峠の難所となる。

# 麻生路郎七回忌川柳大会

日時 昭和四十六年七月十一日  
会場 御堂会館 五階ホール



御堂会館入口

案内役」を割当てたりしました。定刻午後一時開場。一時半、案内役の報せで本堂参集。一時四十分、導師、南御堂難波別院竹中輪番の表白文に始まり、阿弥陀経動行、その間に全員焼香。

仏前、向って左側に、若本多久志氏所蔵の「おれに似よ俺に似るなと子を思い」の句、右側に吉田圭井堂氏所蔵の「ふるくとも僕には仁義礼智信」の師の句を対に掲げ、正面には「柳粹院積路郎」の法名と師の御写真をお飾りしました。

読経後、若本大会委員長、莊重な追悼文を奉り、最後に重誓偈を一同で唱和いたしました。これで第一部の法要は滞りなく終るのですが、別院の間師の司会で大変順調に運ぶことができました。参詣の人数はほぼ本堂の美しい朱色の椅子を満たし、約一五〇。本堂前で記念撮影を終って、会館五階ホールで第二部の句会にうつります。

若本大会委員長の開会の辞につづいて、中島生々庵主幹の挨拶。

「先生没後六年、大正十三年川柳雑誌創刊後六年目といえは昭和五年、先生は川柳社会化運動の真最中。「今日は九五度の暑さだが、私の川柳への熱意は九五度以上だ」と昭和五年八月号に書いていられる。夕桜とんぼがへりがしてみたり」

の句の生れた年である。川柳塔も今年六年目。本日皆様に差上げた路郎先生筆の「あかべこ」の絵。三春張子と申しますが、伝説によると「寺の用材を運んだ赤牛が、寺の完成後、門前に石となって、寺を永く護った」と申します。あの牛の様に永遠に川柳を護り通された故先生。その心を心として、皆さまと共に……。」

葎乃先生はご不参。そのご挨拶を西尾菜氏が代読。これという山場はないが、お心のこもった、いかにも先生の味の滲み出たおんふみ、一同感銘を以って拝聴いたしました。電報の披露、各柳社のお供えへの謝辞の後、堀口堯人先生の講演に入ります。

「路郎とその弟子」の演題は、親鸞ゆかり

昭和四十年七月七日、路郎先生没後満六年今年はその七回忌、南御堂で法要厳修、続いて記念句会、これは生々庵主幹以下われら同人の昨夏以来の念願でありました。梅雨の戻りのようなぐずついた天気も今日は青空を見せ、先生の余徳かと早朝より一同張切っています。地下鉄本町駅は出口がいくつもあって、大阪人でも迷いそう。「地下鉄

この御堂、倉田百三氏の「出家とその弟子」からこのこと。「路郎」と敬称を付けなかったことの詳細を得られ、芭蕉辞世の句碑のあるこの御堂で、柳路郎師の七回忌の法要を営めた御縁をよるこばれる。

「文学的川柳の創始者は路郎・水府・紋太の三師であろう。このうち、誰が一番人間臭かったか。『妻や待たん靴音を高めんか』の路郎師が一番。水府師は「臭さ」を押え、紋太師は「臭さ」を昇華？せんと試みられている。扱、こういうことを起点として、三師の行蹟を顧るとき、基準は次の三、

○どういふ点で柳社を経営されたか

○どういふ文学作品を残されたか

○どんな弟子を養われたか

ということにしようことができる。」これは、塊人先生が、最近、明治大正の川柳史を編まんとして企てられた、その骨組の一端であります。さて、今日は、このうち、その第三について述べんとしてみよう。

「路郎は弟子を見つけ、伸ばすのに非凡の才を持っていた。そして、路郎師の病中、師の背中を掻いて差上げたと随喜した満潮、生前中、句作上で喧嘩ばかりしていた垂鈍、それから梅志。先生の機嫌が悪くて、逢うてもえぬと階下で待つてくのを待った。梅志という人は仲々おとなしく待つていられる人ではない。かほるといふ男か女かわかんような、味のある軽い句の名人。庭を掃いては「地球の顔を綺麗にしてい

る」とうそぶく某氏。随分、路郎門には、つむじ曲り、膝曲りが揃って。当時無産党と気嫌いされた閑東煮屋の庄万よし。社会大衆党の市会議員である。そして、そのおでん屋へ出入していたのが須崎豆秋である。豆秋は、

「電話口花千代さんは舌を出し」

という句と

「どろどろと貧民窟へ陽が落ちる」

という句を無理なく併せ作れる作家である。最後は二柳子。後の緑万である。ある年、路郎師と瀬戸内を船でいった。下船間際になって、二柳子の靴が見付からぬ。船員は案外きよんと「昨夜投身した男が間違えたのと……」。路郎師はそのときのことを書かれたものの中で、「二柳子は今でも幽霊の靴を履いてゐる」これは句ではない。しかし、これは二柳子でなくてはならない。他の誰であっても通じるものではない。路郎師は弟子を育てることの名人であった。」

路郎門の人々は十分個性を伸ばされていって、いちいち主の名を書かないでもわかることとわかれてきました。われわれは先生のその慈眼と鋭眼を通して、他の誰にも真似ることのできない作家に一人一人を仕立てあげて下さったのであります。今更の如くこのことを思い出さずにはいられません。

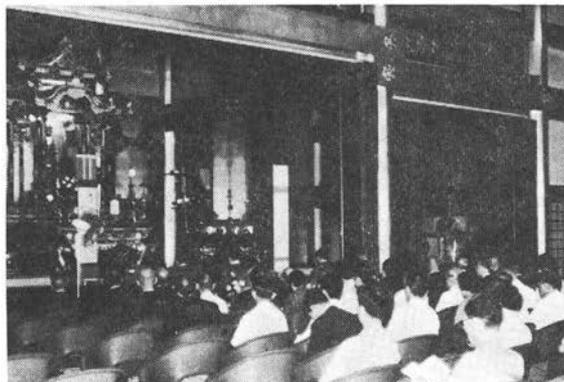
このあとは兼題の披露。これは別欄発表。

今日の句会の縁に逢った各位の中から、口々に第一部の法要から得られたムード、さわ

やかというか、懐かしいというか、もし、席題があつて、それが法要の印象にふれるものであつたらどんな佳句が生れたかもしれんとささやかれています。七回忌にふさわしい各柳社より選者を御願ひし、各地より馳せ参じた柳人を交えた今日の営みを中心感謝しながら閉会しました。

(戸田古方記)

出席—正朗・清泉・薰風・吸江・与呂志・柳志・鬼遊・庸佑・一治・酔々・万の・つき子・文秋・新之助・修史・天笑・摩天郎・小



本堂に集る人々



左から生々庵主幹・堀口塊人氏・近江砂人氏・薫風編集長

松園・緑水・古方・日満・柳宏子・滋雀・形水・栞・君子・智子・不朽・静水・英詩・一三夫・徳三・圭井堂・砂人・弥生・祥月・孤呂二・明朗・弘朗・町紅・通児・静馬・小石・生々庵・八郎・一舟・たかし・竹荘・正夫・不二也・今雨・紅月・言也・大八・素身郎・水客・久米雄・メ女・千代・勝晴・静歩・瑞川・勢火・定子・盛男・恒明・季賛・トメ子・双栞・没食子・いさむ・思月・波郎・喜風・潮花・幸太郎・文晴・太路・礫・春果・伊升・徹舟・清造・旅風・葵水・千寿子・太

茂津・維久子・誓二・亜成・まさひろ・百酒・迷朗・醉夢・聰夢・千万子・左久良・可動・本蔭棒・操子・幸代・花梢・肖二・綾女・花村・鶴丸・欣一・醉升・あいき・儀一・いわを・緑之助・牧人・狂二・東洋樹・孝風・静夢・天樹・十郎・久司・塊人・宣介・凡吉・いさむ(磯野)葉子。(河井庸佑整理)

兼題「麻」

福永 清造選

句 魂いまささやく麻生路郎抄 千翁  
嫁ぐ荷の麻縄父に締められ 兎男  
麻ひもに疎開の頃がよみがえり 聰夢  
麻縄をしめつつ左遷の地を思う 庸佑  
水都祭観にきて麻の蚊帳に寝る 徳三  
扇風機麻の背広へ向きを変え 英詩  
来客と社長くつろぐ日の上布 太路  
麻特舞台は息をのむシーン 小石  
麻タッチ真似てテトロ値上げる 形水  
本麻が自慢の裾のしわを見せ 好郎  
ベン肝肌の他に麻雀肝肌も出来 百酒  
公害に住んで縁ない麻の蚊帳 肖二  
大学が麻雀狂にしてかえし 白汀  
麻酔からさめて見つけた母の顔 鱗魚  
麻服の体温クーラーに盗まれる 惠二朗  
青雲の誓いを麻の緒で包み 一二三  
冷房完備麻の感触忘れさせ 正三  
老骨を麻に包んではずむ猪口 恒明  
麻紐の母の心を解く包み 幸代  
ナイロンに追われ麻繩棚で拗ね 柳宏子  
麻かやの思い出子等に用はなし 明朗  
麻を着る女の肩の線がなし 秀子

麻座布団どっかかと鮎の骨を抜き 吸江  
ハンカチは麻ネクタイは特価品 虎城  
麻の中蓬及ばずながら伸び 醉升  
Gメンに麻薬と映る芥子の花 静馬  
麻糸を家風の隅で巻いている 静歩  
麻の実を掌に開拓の夢満たす 静夢  
執念の麻のロープが追ってくる 小松園  
手配マインにだまされ麻袋が重い 孝風  
パンタマイン心は麻となり乱れ 礫  
バント堂々乱麻の世の汚職 綾美  
ステテコが麻の背広に王手飛車 天笑  
口が手になった麻痺の子詩を描く 醉夢  
麻を着て今日から香水を替える 薫風  
蟬の声麻の喪服の列で聞く 一三夫  
麻の蚊帳母には母の城があり 水客  
二代目の歴史も刻む麻の蚊帳 徹舟  
麻酔から醒めると妻が手を握り 春果  
その頃の紳士で写る麻の服 勢火  
古古米の不名誉に泣く麻袋 鬼遊  
麻の蚊帳めくれば父の墓がある 天樹  
キユーピット矢々に麻葉チヨット 酉合  
麻縄の手ごたえ海の唄がある 雀踊子  
余白うずめる麻の着物は炎えている 葉子  
麻酔から覚めてまだまだ死にたくも 清造

兼題「生」

増井不二也選

公害の酷しさカラーの生放送 緑之助  
生甲斐を憶うとするめが反ってくる 静夢  
石塔の生命耐えて来た丸み 万的  
生き字引けむたがられることばかり 恒明  
老残の生き甲斐なればバラ作る 伊升



蟻の塔ありも暮しの知恵を持つ 文 秋  
 暮れ残る塔へも一度ゆく宿衣 好 郎  
 石塔の苔と対話をしてあきず 志 二朗  
 キロチンの歴史を刻む塔ぶきみ つき子  
 塔に佇ち夫婦の想うこと同じ 形 水  
 ガイドさんに言われて気づく塔が 恒 明  
 小石積み砂のお山に塔が出来 一三夫  
 夕映えの塔画帖に秘めた過去 葉 子  
 遙かなり男は誰も塔を持つ 薫 風  
 塔ゆれて池の私憤へさからわず 天 樹  
 追憶に心の塔はこおりつき 波 郎  
 塔の先き山の端小さく暮れ残り 柳 志  
 写される構えか塔の立ち姿 野 迷路  
 積木の塔最後の一つに手がふるえ 一 栄  
 見学へ五重の塔がそり返り 久 米雄  
 人を愛して心の中に築く塔 七 面山  
 五重の塔鳩もどかに鐘を聞き 竹 荘  
 宇宙のどこかにひそかに夢の塔 緑之助  
 塔のある街で偶話を買ってくる 静 夢  
 塔の影の長さ悲しみかも知れず 清 造  
 塔高く群衆のなかに影を持つ 水 客  
 アドバールン塔の高さを軽く抜く 聰 夢  
 女人高野塔も女人の性を持つ 醉 々  
 (路・幸・七は次号発表)

★ 入選句を全部発表の予定だったが、ご覧のとおり  
 の家庭の事情で申しわけありません。選者諸先生やみな様におわびします。

「予定の半数で、またまた苦杯を喫した」と

## 一同会柳川はらけ

725 広島県竹原市竹原町田中

山内静水方 電話(08462)2-1025

脇	榎	高	小	森	時
本	田	橋	島	井	広
政	英	鬼	蘭	菁	一
己	詩	焼	幸	居	路
山	岡	楠	箕	生	三
内	元	田	田	信	宅
静	春	貞	浄	笑	不
水	昇	子	美	子	朽

頭を抱えるボクに、  
 「人数じゃないよ、内容だよ。りっぱに成功させたよ」と東野大八氏。  
 「くるべき人は来た、ただ若い層がさびしかっただけ」とは堀口塊人氏。  
 若い幹事諸氏の、この大会にうちこむ情熱はすごかった。こんなファイトを見たのはボク

クははじめてである。  
 ただ一つ胸の張れるのは、懇親宴に80%残ってくださったことだ。多久志大会委員長以下ホッとしました。ありがとうございました。  
 「霞乃先生のメッセージ、美文だった」と大八氏が感激された。ボクも同感である。  
 (ベン・一三夫。カメラ・新之助)

電 話

藤岡花梢選

呼びだしをたのめば小言も丸きよ  
先方のもめたる様子受けきたえ  
ダメらしいな電話の受けこたえ  
電話口妻の意見が先きにもれ  
かかってよよさそう電話睨みつけ  
打ち合わせどおりに恋のベルも鳴り  
切つてから電話へ怒る顔が出来  
病状を問えば電話へ軽い咳  
その足ですぐ飛んでこいとも電話  
声低うなつて飛になる娘の電話  
倒産をよそに電話が鳴りつづけ  
用意して待てば電話で断わられ  
娘は留守と男の声に電話切り  
気がつかぬ音を電話でキャッチ  
孫からの電話社長の顔くずれ  
電話に期待はずれの声がある  
お隣りへ電話で話する寒さ  
国際の電話地をいき空をかけ  
商売の口調にもどる電話口  
朝めしの前に電話でひと儲け  
笑い声のみこんでから受話器とる  
電話帳繰って赤子の名を思案  
すぐ切れた電話気になる親心

溜息が笑いに交る電話口  
暇な娘の気まぐれ電話に呼び出さ  
そばに誰か居るらしい用件だけで切り  
筆無性電話値上げも我慢する  
受話器とつてからしたと鼻つま  
電話口しんどい話出してくる  
長電話コード巻いたり伸ばしたり  
目の前の客を待たせて長電話  
借りきて電話帳へ線を引き  
さよまの余韻ゆつたり受話器置く  
社長からの電話とわかる声になり  
無事だった第一声をきく電話  
書くよりも電話が早い長話し  
有線でおめでた部落中に知れ  
借り電話ですと居場所をばかし  
肝心な事は符丁で云う電話  
電話口片手にビールのコップ持ち  
受話器手に手ごころの嘘考える  
卓上へ返事に困る電話くる  
住  
入れ知恵が怒つたらしい電話口  
いんぎんな電話ステテコとは知  
突然へただ棒立ちとなる電話  
核心に触れて電話の低い声  
受話器ガチャリと長い夜となる  
電話口今日の顔色見抜かれる  
旅にまで銷をつけてある電話  
呼びだしの電話で店を持ちはじめ

八面山 七面山 素身郎 藤持 百水 静水 カズエ 松彦 露杖 利美 古方 初甫 佳人 恵子 佳女 不二 晓明 奇童 宵明 里風 杜月 千代香 克枝 迷朗 木魚

電話でも云えず顔見てなお云えず  
軸

モートル  
モートルの横のそば屋の儲け高  
土地で儲けモートルで儲け農機  
スタンドとモートル関所と建ち  
ハネムーンらしい新車も入り込み  
名はモートルけつねうどん  
菜の花を照るモートルネオンの灯  
モートルへ独りで泊る無粋者  
無言のままモートルの方へ切り  
モートルで幹事たつぷり汗をかき  
モートルの噂整地のブルの音  
モートルへ曲るハンドル緊張し  
モートルの主は農家の二男坊  
トイレだけ借りてモートル後に  
休耕地いっそモートル建てたるか  
モートルの帰りの事故で妻に知れ  
停退へモートル支配人の椅子

静水 一保選  
八郎 風雅 明章 扇水 里風 八郎 醉々 七面山 素身郎 静歩 カズエ 春日 百水 奇童 輝親 松彦



# 川柳家の暦

(八月生まれの人)

「川柳家の暦」は故白柳さんが数年前この取材に走りまわった労作である。十二分までノットに書かれてあるので順を追って発表していくが、句は白柳さんが選んだもので作家の代表句という意味ではない。(編集部)

## 遺稿 清水白柳

1日	山 中 甚 八 M42 巳酉 京都	7日	山 内 狂 月 M14 辛巳 鹿児島	13日	家 野 三 新 T12 癸亥 岡山
1日	吉田 笙 人 T1 壬子 福島	8日	田 中 司馬亭 M30 丁酉 東京	13日	鈴 木 青 柳 M41 戊申 函館
1日	伊 藤 定 子 T7 戊午 奈良	8日	野 坂 つき子 S15 庚辰 貝塚	13日	横 山 一 声 T7 戊午 岡山
1日	林 瑞 枝 T14 乙丑 米子	9日	寺 田 季 月 T5 丙辰 平塚	14日	三 浦 太 郎 丸 M20 丁亥 東京
2日	桜 井 思案坊 M25 壬辰 五条	10日	古 沢 蘇 雨 子 T2 癸丑 佐賀	15日	野 本 吞 水 T1 壬子 吹田
2日	榎 田 柳葉女 M31 戊戌 静岡	10日	有 信 新 之 助 T11 壬戌 大阪	16日	重 田 直 三 洞 M41 戊申 大阪
2日	加 藤 志 女 太 M37 甲辰 伊東	11日	国 弘 半 休 門 M39 下関 下関	16日	石 曾 根 民 郎 M43 庚戌 松本
3日	高 木 夢 二郎 M28 乙未 相模	11日	石 居 高 志 T14 乙丑 東京	18日	谷 尾 昇 T13 甲子 神戸
3日	児が病んで小児科のある町を知り	11日	受話器を押えて留守だといひましょか	19日	小 川 静 観 堂 M21 戊子 伊丹
3日	アカシヤの花の想い出甘き恋	12日	下駄箱の中で夜通し声がする	19日	小 谷 源 氏 M38 乙巳 東京
3日	三上 正 祐 M33 庚子 芦屋	12日	村 田 紫 蘭 M27 甲午 京都	20日	安 平 次 弘 道 T2 癸丑 美弥
6日	野村 松水 M34 辛丑 小松	12日	綿菓子箸さまよえる裸球	21日	深 野 吾 水 M31 戊戌 大阪
		12日	黒川 紫香 M40 丁未 尼崎	21日	福 永 清 造 M39 丙午 京都
		12日	綿菓子箸さまよえる裸球	21日	かくれんぼ母は見つかるどこに
		12日	黒川 紫香 M40 丁未 尼崎	21日	石 川 侃 流 洞 T6 丁巳 下関
		12日	黒川 紫香 M40 丁未 尼崎	21日	石 川 侃 流 洞 T6 丁巳 下関

大工さん持てば素直な鋸であり  
 22日 金 泉 萬 楽 M32 巳亥 大阪  
 賞めすぎる祝辞両親こそはゆし  
 22日 水谷 竹 荘 M34 辛丑 大阪  
 さし上げた傘が追いつく戎橋  
 22日 菊 田 いさむ S2 丁卯 京都  
 寝つかれぬはず盛り場の裏の宿  
 23日 光 好 陽 子 T4 乙卯 岡山  
 社会事業につくした女史の白い髪  
 24日 正 本 水 客 M40 丁未 大阪  
 お休みなさいと云うて女中の顔になり  
 25日 小根田 白 扇 M33 庚子 京都  
 成り行きにまかし雑踏逆行す  
 25日 平 松 圭 林 M42 巳酉 東京  
 日本海蟹は日本の灯を慕い

26日 渡 辺 蓮 夫 T8 己未 東京  
 秋風へ日和の石も息をつき  
 26日 松 浦 春 魚 S6 辛未 三重  
 もうける人で新聞記者ぎらい  
 26日 野 村 岬 月 S3 戊辰 出雲  
 古傷にふれて茶碗は冷えたまま  
 27日 東 滋 郎 M42 巳酉 京都  
 神さまをだましてカラの樽を積み  
 27日 坂 井 三 葉 T9 庚申 岡山  
 お隣りが交番錠をかけ忘れ  
 27日 岡 田 香 芳 T15 丙寅 高知  
 てのひらの歌がこぼれる娘とあるく  
 27日 龜 山 恭 太 S3 戊辰 大阪  
 勉強に欲の出た子の身を案じ  
 27日 島 本 泰 子 S3 戊辰 和歌山

名作にふれる喜び茶のけいこ  
 28日 森 下 愛 論 T6 丁巳 京都  
 世話やける人だと女嬉しがり  
 28日 磯 野 いさむ T7 戊午 摂津  
 歌集もつ才ある姪の家庭不和  
 28日 服 部 茂 水 T2 癸丑 岡山  
 終点のない円周を今日も駆け  
 30日 秋 山 静 舟 S4 己巳 静岡  
 素晴らしい誤算男の子が生まれ  
 31日 蔵 多 李 溪 M43 庚戌 東京  
 病める妻洗濯日和などという  
 (\*有名柳人が脱落している月もあり、白柳氏いまは亡く、この点で諒承のほどを)

# 初歩教室

— 題「上」 —

本田恵二朗

— 足跡をつけてお月さんすみません —

アメリカの宇宙船が、はじめて月に着陸して、二人の宇宙飛行士が、月の面を眺めるように歩く姿をテレビで眺めていて、私の口から洩れた声が、この句であった。宇宙を競い演は、私の一句がこぼれ出したところまでで終演にしまらいたかった。今日の宇宙劇は行き過ぎてしまつて、遂にソの宇宙飛行士三名が悲劇的な死を演じてしまつた。それでもなお続けようとするのは、その裏に戦争への備えとする下心があるのではないかと、素人である私などは憶測したくなる。そのまた裏には人類の死滅が秘められているような気もする。行き過ぎは、総て破壊のもとになるのだ。川柳界に於ても、諸大家の血みどろの努力によつて、素晴らしい進歩を遂げて、現代川柳の形態が整えられて来て、私は快哉を叫んだものだが、それでもあきたらぬのか、私にはどうしても解釈の出来ない句に出会う

ことしきりとなつた。これは行き過ぎである  
と私は思つてゐる。今にこわれるぞと思つたりする。ほんとの進歩とは、決してこれないものにちがいない。進歩したつもりが、その到達したところは破滅だったでは、正しくナンセンスである。言いたいことが山ほどあるが、今回はこの辺でストップしておこう。いつもの如く皆さんの句と対談しよう。

まあ上れに妻少し不服なり

三十四

(基仇を呼び上げ妻ににらまれる)

高速路屋根の上をば通り抜け

隼人

〇〇をば——は頂けない表現だよ。

(屋根の上すつ飛んでゆくハイウェイ)

選挙戦笑顔安売り上機嫌

富士

(選挙カーの上から笑顔誇りてゆく)

上を見ず身のほど知ればまた楽し

濁水

なんだか格言みたいな表現だな。

(気楽さは上を見ぬことだとわかり)

雨上り野辺の雑草色を増し

賛平

説明に過ぎないよ、もう一歩前進だ。

(雨上りの雑草はつらつ陽をばはじく)

世の中は上あればこそ下もあり

秀村

下手な格言だ。おみくじの文句みたいだよ。

(上があるから下があり面白し)

面白しと、とほけておけばよいのだ。

上役の停年間近か顔のしわ

進

顔のしわと、わざわざ顔と言わなくても皺と言えたいがい顔のしわのことだよ。そこで

顔一字をのけて、リズムを整えてみよう。

(上役の停年近し皺深し)

貧乏は上を見ないで下ばかり

久子

貧乏性だな上を見ろ上を見ろ

誓二

子の知恵はもう上手に嘘をつき

露二

(あんな嘘うまくつくほど知恵がつき)

上様は受取りまうつてえらくなし

露芳

(上様とある領収証へ少ししてれ)

懸案も首尾上々と茶をすすり

万竿

(懸案の首尾上々ゆつたり茶をすすり)

上司からの電話へペコペコ頭下げ

保夫

(受話器ペコペコ上司の声とがる)

スカートの裾の上りようど迄も

八郎

(スカートの裾の上りようど迄も)

切上げの噂とぶ円気味悪し

敏

(切上げの噂とぶ円気味悪し)

上を向いて歩けと言うけど無理な道

千夏

(上を向いて歩けと言うけど無理な道)

逃げた籠上から雀のぞいて

静子

てい——で止めるのはもうお古いよ。

(籠抜けた小鳥けろりと屋根の上)

ナツメロへ父は上機嫌の首を振り

露杖

(ナツメロへ父は上機嫌の首を振り)

上役の癖も教えて引継ぎし

露杖

(引継ぎへ上司の癖も添えてやり)

上の子は祖母の過保護で手がかり

茂美

(上の子は祖母の過保護で手がかり)

女性上位得したことが多かった

静観堂

女性上位それは世話女房のことだと解すべき

句だ。相当に得をなされたらしいが、今はな

つかしい思い出である。愛情と感謝が秘められて

いているよ。

(女性上位でたっぷり得した思い出よ)

年上の妻に頭をおさえられ

双楽

年上の妻に頭をおさえられ

年上の妻に頭をおさえられ

この句材を、もっと川柳らしくしたい。  
(年上の妻やんわりと敷いてくれ)  
つき上げに幹部あぐらをかいとれず

上海の土産にメイドインジャパン

まさひろ

上役が消えて徳利がよく歩き

藤持

上役の見舞寝巻がかしこまり

同

天を衝く意気で歩けばつまずき

止水

出戻りの女に上向くわけがあり

同

酒の上のことも中年許されず

弘生

お上手のあとの皮肉にえぐられる

同

上座だけあけて会議の待ちぼうけ

曙光

軒太楼

身の上は五十歩百歩夜の蝶  
上役に交なところで貸しができ  
棚の上もう椅子に乗る知恵がつき  
上を見て下を見てあきらめる  
上を見てあすの焦点考える  
損の上塗り百も承知の下心  
上役に酌がせて唄う旅の夜  
その一瞬上から下へ女の目  
この調子でよいのだ。精進あれ。  
上品な仮面の下にある妬心  
保育所のブランコゆれる雨上り  
ゴム長が重たくなった雨上り  
上履きがちびて停年ふと思う

慶彦 利美 花子 翁童 春海 頼次 美代 同 迷朗 久司 同 カズエ

上気した二人を送る発車ベル  
上履きも入れて退院の包みでき  
新入社一度は上司の目にとまり  
恋ごころ親の意見も上の空  
上見れば切りなし下もきりがなし  
同 新之助 比呂路 同 繁子

題一秀一八月二十日締切(十月号発表)  
宛先 岡山県倉敷市下津井三五二(☎七一一)

本 田 恵 二 朗

(正誤) 題一左一  
新之助氏の句、乗りつけ(けがが抜けてる)

八郎氏の句、見てる(るが抜けてる)

## 会 柳 川 島 市 阜 岐

魚 楽 子  
鱗 清 恵  
川 川 瀬  
市 井 高

## 迎 歡 大 人 柳 川

はまち・いし鯛  
小 山 の 釣 り 堀 り

南紀 那智勝浦町宇久井駅前  
電話 宇久井局 57 番

大萬川柳

「シヨック」

入選発表

選者 川村好郎  
投句総数 五百六十二句  
入選 五十句

暴落のシヨック夫に言えぬ金 塚 宏子

連敗のシヨックヘマイクまとい？ 岡山 止水

ドイツ語の対話が暗示したシヨック 下関 木石

親ゆずりやっぱり禿げたまシヨック 藤井寺 吸江

示談でほするシヨックなレントゲン 大阪 阿茶

シヨックにも慣れ外科医の箔がつき 松原 史好

コップ酒ぐつとシヨックを飲んず 藤井寺 いわを

痛いところ突かぬシヨックの逆うらみ 愛媛 みのり

社宅中シヨック残したご栄転 今治 青女

シヨック死へ科学のメスの無表情 守口 笑風

吉報のシヨックは笑いにすぐ変り

感情をころし静かに聞くシヨック 塚 青香

倒産のシヨック再起の火をもやし 大阪 双楽

本当の母ではないとわかつた日 塚 慶之助

奥さんの方がケロリとシヨック 大阪 保夫

衝動を隠しきれない辞令聞く 大阪 滋雀

蓋明けてみればシヨックを客入り 大阪 緑水

街角のシヨック月賦屋やり過し 大田 軒太楼

シヨックを再起をさせる真鍮がす 大阪 比呂路

はつきりと詐欺とらぬ日のシヨック 門 鉄児

失恋のシヨックと別な娘の食気 鳥取 佳女

シヨック死の場所もあると二号邸 尼崎 利美

だしぬけの死なり仏を悼む顔が 富田林 美代

灯明をあげてシヨックの度を鎮め 笠岡 喜久子

親友に話せばシヨックすこし減り 塚 天笑

何故シヨックなのか判らぬ娘の日記 塚 真沙子

失恋のシヨックが見合いにまらせ 神戸 どんたく

新妻の素顔シヨックなハネムーン 神戸 どんたく

引退へ妻のシヨックを思う帰路 兵庫 可住

留年のシヨック茶の間の灯が暗い 兵庫 可住

信は己れひとりとするシヨック 倉敷 惠二朗

純情へ不信を植えてゆくシヨック 倉敷 惠二朗

背信のシヨックそれから貝になる 大阪 柳志

さもシヨックみたいな顔で聞上手 大阪 柳志

不合格のシヨックヘママの方が寝込み 米子 千代

達者なのが自慢へ保険断られ 米子 千代

シヨックと触れずにくれる母の茶 大阪 弘生

第三者ほどに気にしてないシヨック 大阪 弘生

他人事が我が事となる手術台 倉敷 素身郎

シヨック隠す煙草マツチが見当ら 倉敷 素身郎

一時二時三時も聞いてシヨック 自由化で殴りこんでくるシヨック

みんなの暮しが明るくなる  
セキスイのプラスチック



積水化学  
本社 大阪市北区岸堤町1

佳句

口まわりのシヨックにマイク引つ込める 榎原 本蔭樺

血まろの過去ありシヨックに動じない 倉敷 惠二朗

株のこ言うなとシヨックまつつき 大阪 美房

KOのシヨックへ妻として触れず 大阪 小路

自由化で殴りこんでくるシヨック 大阪 一三夫

人ノ句

倉敷 恵二朗

プロポーズまたシヨックを抱きしめる

地ノ句

広島 鬼焼

忘れたいシヨック他人は触れたら

天ノ句

大阪 君子

お月さまのシヨック地球がも限り

選者吟

シヨックまだ心の隅に残る妻

〇寸評

「朝寝坊起しにいつたら死んでいた」なるほどシヨックにちがいないが、ただシヨックを説明解説にとどまっている句が多かった。

「……するシヨック」と下五にシヨックを持ってゆくと余程着想が交ってないとの句のシヨックの状態とダブることになる。

シヨックを受けてそれからどう展開するか、その心の動きを句にしたものに魅かれる。こういう題材に対する作句表現に選をして私は教えられた。

昭和四十六年度

ベストテン（七月現在）

一 花 梢

一四、〇 富田林

二 文 秋

一三、五 大阪

三 恵二朗

一一、五 倉敷

四 木 石

一〇、五 下関

五 真沙子

一〇、五 大阪

六 水客

一〇、〇 大阪

七 千代

一〇、〇 米子

八 里風

一〇、〇 倉敷

九 みのり

九、五 愛媛

一〇 天笑

九、五 堺

一一 扇水

九、〇 倉敷

一二 どんたく

九、〇 神戸

一三 つき子

九、〇 貝塚

一四 弥生

九、〇 東大阪

一五 吸江

八、五 藤井寺

一六 鬼焼

八、五 広島

一七 圭井堂

八、〇 大阪

一八 柳志

七、五 大阪

一九 君三夫

七、五 大阪

二〇 瑞枝

七、五 大阪

二一 牧人

七、〇 米子

二二 筒子

七、〇 神戸

二三 慶之助

七、〇 倉敷

二四 静馬

六、〇 堺

二五 形水

六、〇 高槻

二六 形水

六、〇 大阪

二七 形水

六、〇 大阪

以下略

昭和四十六年度第九回

「差別」 締切 五句以内 八月二十日

第十回 「捨て石」 締切 五句以内 九月二十日

投句先 縮切 九月二十日

大阪市南区鯉谷仲之町二〇

川柳塔社 大萬川柳係

暑中お見舞い申し上げます

季節料理・折詰

大 萬

大阪市阿倍野区松崎町

TEL (623) 5031・5032

南区豊屋町三ツ寺センター

TEL (211) 9184

# 柳 界 展 望

あちらからこちらから  
お便りを待っています。

(橋高薫風・担当)

主権、堺川柳作家協会、後援、堺観光協会。  
▼柳さっぽろ六月号は主幹齋藤大雄著柳文集「雪やなぎ」特集を掲載、また、阿万万的・松川社共著「の心のこもった評を桑野晶子さんが執筆しておられる。

▼前号既報の「岡山の川柳」は弓削川柳社編、岡山文庫三十八集として、日本文教出版株式会社から五月一日に発行になった。片山巷雨・浜野奇童・長谷川紫光直原七面山氏らの写真、取材などで岡山の川柳の沿革を紹介している。弓削駅前真を巻頭に、本社関係では路郎・霞乃川柳生活五十年記念の写真、服部十九平・浜田久米雄・本田恵二朗・福島鉄児諸氏の写真が掲載されている。会員制で六、七千人の柳人以外の読者があるという。なお、七月十八日に出版祝賀会があった。

▼石丸弥平編並に画「ごだやら人生」A5判百三十頁蒼海出版社刊、定価七百円(送料共)が九月初旬に発行になる。「ごだやら」とは東北地方の方言で泥んこのことである。路郎、霞乃先生はじめ本社同人の句が多数登場する、東京都板橋区小茂根四の十二の十四石丸弥平宛。  
▼蟹の目川柳大会は六月二十日(日)午前十一時から金沢市本多町中央公民館で

▼路郎忌の七月七日は台風十三号が北上して大阪に雨をもたらした。夕刻梅雨明けの雷がどどろく。だが十一日の川柳大会には好天に恵ぐまれ、多数のご出席をいただきお礼申しあげる。霞乃先生はお身体都合で十一日の七回忌川柳大会には出席されなかった。

▼周魚賞(一九七〇年度)が決定、五月一日きやり句会の席上、表彰状と純銀盃が受賞三氏に贈られた。助かった金は夫婦で返しに来、東京都高木九史孝行と知らぬ孝行美しい東京都小谷源氏たとえばの中に本心言っ

▼大嶋瀧明忌記念川柳大会は八月八日(日)午前十時から熊本市白川公園内社会教育会館で開催。兼題、一年・小さい・黄金・真中(まんなか)・信頼 投句は七月末締切り、出席者当日出句。

▼噴煙(熊本市)の近詠欄景行譜は六月号から代表幹事吉岡竜城氏が担当される。▼川柳高知は六月号から、誌面の刷新充実が目につく編集人壺谷桂緑、発行人川竹松風。

▼小幡里風・佐藤三幸堂・辻本平還暦、本田八笑人年祝合同句会は六月二十日(日)午前九時から倉敷市二島養父の戸島神社で開催。▼ふあうす川柳社の例年の全国川柳作家年鑑も十六回を数えることになったが今年には千七百五十六名の参加があった。七月十五日発送の目標である。

▼第五回周魚忌募金は四月十一日桜満開の玄院院へ。きやり吟社は八月には六百号を発行する。

▼第十三回花童子賞、第一席に米沢苦郎氏(函館市)

▼第五回周魚忌募金は四月十一日桜満開の玄院院へ。きやり吟社は八月には六百号を発行する。

▼第五回周魚忌募金は四月十一日桜満開の玄院院へ。きやり吟社は八月には六百号を発行する。

▼第五回周魚忌募金は四月十一日桜満開の玄院院へ。きやり吟社は八月には六百号を発行する。

▼第十三回花童子賞、第一席に米沢苦郎氏(函館市)

▼第十三回花童子賞、第一席に米沢苦郎氏(函館市)

▼第十三回花童子賞、第一席に米沢苦郎氏(函館市)

▼第十三回花童子賞、第一席に米沢苦郎氏(函館市)

▼第十三回花童子賞、第一席に米沢苦郎氏(函館市)

## できたての生ビール アサヒビール 本生

レーベルの日付けは新鮮なうましのしるしです

いに頭張って下さい。

▼浜田久米雄氏(岡山県同人)は六月十二、十三日の両日開催された国鉄川柳人連盟、佐渡大会に夫人や令孫を同伴八人の団体で参加され、恵まれた天候で最適な観光の旅をつづけられた

▼八木摩太郎氏(堺市同人)が堺観光協会発行の「観光さかい」の冊子に昔の夜市風景を執筆、南北・水府・路郎三氏の句を紹介、好評を得られた。また、六月十二日から四国八十八カ所巡拝の四泊五日のバスツアーを持たれた。ほとんどの日が雨で難儀をされたが、

足摺岬や弘法大師も見残されたという「見残し」の島巡りなど天然の美に一驚された。「お大師も見残しだけは見残され」

▼米沢暁明氏(大洲市)は六月十八日京都泊り、十九日は天の橋立から城の崎泊りの校長会の旅。一ブラッりに鳩たわむれるのも京都は公務と家業の間にあって多忙を極めておられるが恒例の山陰大会を東伯町で開催の予定で、時期は九月か十月の上旬であると。目に青葉 ああ人生は忙しい

### 新同人紹介

鈴木村 諷子

—真山・一三夫推薦

松本 信雄

竹川 河舟

脇本 椰子郎

—快夢起・多久志推薦

▼水粉千翁氏(倉敷市同人)は六月十六日京都国際会館で開かれた全国能率大会に出席、「来るたびに拾うてかえる京の味」の句信を寄せられた。

▼永松道雄氏(熊本県同人)は昨年夏から脱腸・心臓・肝臓と悪くなり、脱腸は手術で快くなられたが、七十七才のこととて油断がありません。

▼浅野芳朗氏(小松市同人)は今年中になんとか、四十一才の若さで遺言集を出版したいと。

▼山内静水氏(竹原市同人)は六月十二日佐渡での国鉄大会に出席、大野風柳氏らと大いに飲み、十四日からは奥能登の観光を楽しまされた。「樺さばきにわかめが光るたらい舟」

▼垂井葵水氏(和歌山県同人)は六月十七日和歌山東ロータリーに招かれ「川柳とユーモア」について話された。「はよ済んでよかつたなあ」という拍手

▼阿部柳太氏(富田林市同人)長男進氏は六月二十一日心臓喘息で死去。年二十四。葬儀は二十三日午後三時から富田林の西芳寺で営

まれ、本社から、葉、好郎、摩太郎、花梢、吉太郎、美代、維久子、弥栄子、葉子、薫風の諸氏が参列、冥福をお祈りした。

▼小野克枝さん(倉敷市同人)は六月二十日の年祝市柳会で、特別課題の優勝トロフィーは逃がしたが、例年の優勝者となりカップを持って帰られた由。

▼東野大八氏(美濃加茂市)を中心に、大山と金氏(東京都同人)、野村太茂津氏(和歌山市同人)、そして吉田水車氏(名古屋市同人)と薫風は一年ぶりに交歓。金沢での大陸川柳同窓会でのこと。

▼桜川不水氏(下関市同人)は六月二十日の年祝市柳会で、特別課題の優勝トロフィーは逃がしたが、例年の優勝者となりカップを持って帰られた由。

▼岡崎祥月還暦祝賀川柳大会は8月1日11時、松江市労働福祉センターで開催。題「胸上げ・マイペース・人間・山脈・甘党・和・柳話生々庵主幹。大阪から石、万的氏ほか出席予定。

▼岡崎祥月還暦祝賀川柳大会は8月1日11時、松江市労働福祉センターで開催。題「胸上げ・マイペース・人間・山脈・甘党・和・柳話生々庵主幹。大阪から石、万的氏ほか出席予定。

疲労・肩こり・神経痛に

# アリナミン<sup>®</sup>A

☆5ミリ錠・25ミリ錠・ほかに50ミリ錠 ☆食後にどうぞ

☆詳しくは医師や薬局・薬店でご相談ください。



## タケダ

59



▼原稿用紙にペン書き。文字は楷書。締切は25日着便。書式は発表誌のように。

金井文秋担当

川柳塔まつえ

岡崎祥月報

努力とは別な運命線があり 苑 花  
教科書は二の手漫画に読み耽る 澄 水  
木の間越しいま来た道を小さく見る 花子  
度の過ぎたマニア家運を斜めにし 越 子  
二尺差し明治の母の手に生きる 泉 甫  
一期一会速のく影をきざみこむ 千代  
女手で出来ず男の手を借りる 雪美  
無いものは無いと強気の懐ろ手 軒太楼  
心して聴ける一つに除夜の鐘 紫 叻  
加減して見ても総理に物足りぬ 鶴丸  
安定した生活何んだか物足らず 孤呂二  
駅前の混雑栄転らしい人 町 紅  
ダイヤル相違火葬場でございます 通 児  
マイカーで行くから要らぬ梅雨の傘 兎 男  
大船を漕ぐ四人の家族やつと来る 祥 月  
ウイロー社(ハワイ) 林蒼蛇楼報  
良く似合うと言わぬ何時もあのドレス あき坊  
姿見へ似合い ますかと背を向け 万里歩  
転々とミニの似合う娘職を替え 浮 草  
布哇ぼけ赤のアロハが良く似合い 洋 山

大男 身体に似合わず声やさし  
顔に似合わずえげつない手で儲け  
いい知恵を教える税吏と酒のみ  
脱税はしても家元文化財  
世のひずみ税脱男を英雄視  
ふと嘘をつく気も起る高い税  
所得税払うて出れば空青し  
税金を払う間はまだ花さ  
川柳ささやま旬会 河原みのる報  
修学旅行絵はがき頼りに話す孫  
絵はがきの通りに写す二重橋  
スモッグもヘドロも見ず絵はがきの  
絵はがきに一句を添えてハネムーン  
ベストテンに一言を添えてハネムーン  
部活では酒飲むだけがベストテン  
所得税ベストテンにはほど遠く  
菊を挿す曾ての米作ベストテン  
ベストテンをやったなアとごつい手  
十大ニュース今年も暗さが勝ちぞだ  
伊達巻が人生航路の初歩を踏む  
伊達巻とすかした衿が包む輪  
伊達巻をきつた女の城とすむ  
今日よりの試歩へ伊達巻しかと締め  
裏服さる伊達巻過ぎし夢を追い  
やけくそを紙に丸めてやわらげる  
やけ酒がギクリと醒めた留置場  
やけくその義理の見合いが妻になり  
やけくそで切ったたんか役になち  
ヤケクソの布石を策とあわてさせ  
世話好きが親切を通りこせ  
親切を受け身のままの不甲斐なさ  
泉水 北海 雪三 女石  
眺め 快夢 蒼蛇楼  
初音 吉裕 をさむ  
八陣 武石 近江 橋竹  
茂宏 村呂 羽世  
ゆきお 富士子 無聖  
弥太郎 みる 古仙  
刀児 孝孝 素水

親切なガイドは実習生だった 猪村  
旅先の思い出親切だけ残り 雅佐女  
上げ底に親切本位と札を立て 枝葉  
親切な車に拾われちとこわい 清香  
席譲ってくれた少女の瞳がきれい 泰舟  
底辺の親切一日棒にふり可住  
南海電鉄川柳会(大阪市) 辻 圭水報  
交通マヒ新車性能もてあまし 耕人  
山越えて新車を見せにおくに入り 金三  
ロックおろして新車はパパの別天地 天笑  
念願の新車を階下を開け渡し 頂留子  
城北明朗会(大阪市) 川口弘生報

出藍の青も都塵でうすよこれ 顔 弘生  
GNPうちの戦士は青い顔 太茂津  
青い眼が上手に安来節踊る 三十四  
根性が今日を築いた青い屋根 進  
あごひげものばし青年じじむさし 春果  
共産党支持の娘もいる藤の棚 葵水

暑中お伺い申し上げます

短期速成  
費用低廉  
懇切指導  
入会随時

関西奇術教室

TEL 071-218

大阪市南区大宝寺仲之町一

清水白柳遺句集刊行記念句会

日時 八月七日(土) 午後六時  
会場 以和貴荘(いわきそう)

阿倍野区松崎町二丁目  
電話622・1275番

兼題 柳話  
「ノート」  
「救急車」  
「釘」  
「壁」  
西尾 菊 八木 西田 中島  
沢 摩天郎 田 生々庵  
小松園 天郎 柳宏子 生々庵  
栞 選選選選選選選選選選  
各題三句敵守

★投句だけの方は切手50円封入  
★電話での投句はご遠慮願います

大阪市南区鯉谷仲之町20

川柳塔社

電話大阪(271)3985番

9月の兼題 「ポイント」 「印相」  
「天気図」 「追善」

・ 募 集 ・

十月号発表表(8月15日締切)

川柳塔(10句) 中島 生々庵(選)  
近作柳構(10句) 川村 好郎(選)  
課題吟(各題5句以内)

「奇術」 村田 瓢太(選)  
「黙否権」 小林 孤呂二(選)  
「ビジョン」 森田 茗人(選)

★川柳塔欄の投句は本社同人に限ります。  
★用紙はなるべく柳箋をご使用ください。

十一月号発表表(9月15日締切)

川柳塔(10句) 中島 生々庵(選)  
近作柳構(10句) 川村 好郎(選)  
課題吟(各題5句以内)

「ホクロ」 宮尾 あいき(選)  
「足並み」 江国 幽谷(選)  
「通訳」 工藤 甲吉(選)

★原稿は四百字詰原稿用紙に四枚以内。文字  
は楷書で新かながつかいにしてください。

9月は川柳忌句会

定価 百八十円(送料十六円)  
半年分 千七百円(送料共)  
一年分 二千二百円(送料共)  
昭和四十六年七月二十五日印刷  
昭和四十六年八月一日発行

大阪市内南区鯉谷仲之町二〇番地  
編集兼 発行人 中島 蓬太郎  
印刷所 大陽印刷株式会社  
郵便番号 五四二  
大阪市内南区鯉谷仲之町二〇番地  
発行所 川柳塔社

電話大阪・二七一・三九八五番  
振替口座 大阪・三三三八八番

# 〈朝鮮人蔘〉の効用



二千年以上

の伝統をもつ朝鮮人蔘が

この宇宙時代に

すぐれた薬として欧米でも

再認識されています

（ヒヤク）は

この朝鮮人蔘の



有効成分をそっくり  
カプセルにつめた  
現代人の薬です

- 体力を充実させたい方
- 疲れがとれにくい方
- 貧血・冷え症の方
- 老化現象の方
- 胃腸の弱い方



山之内製薬株式会社  
東京日本橋本町2-5

朝鮮人蔘エキス製剤

# ヒヤク

45カプセル・90カプセル・300カプセル

カプセル

## ・ペンペン草・

★暑中お見舞い申しあげます。

★路郎忌川柳大会を盛大にしていただき、各柳社や友情で出席をたまわった方々に厚くお礼申しあげます。

★白柳さんの遺句集の評判もよし、感激のしつぱなしである。

★路郎作品休載。各地柳壇までシラケてしまった。ごカンベンください。

★もうすこしペーシがほしい。

★七月は路郎忌、八月は水府忌。

★岸本水府先生は、路郎先生を追って、ちょうど一か月後の40年8月6日に亡くなられた。ともに

★そのころボクは川柳と断絶して水府先生から、川柳抜きでたまわっていた。

★川柳をやるまえ、水府先生と標語の共選を二回したことがあった。その

★選のことでフソンにも水府先生にタテついたこともあったのに、水府先生は目をかけてくださった。

★「川柳」時代、水府先生は敵の総帥だった。映画

★全部敵というのがボクのことである。

★松江へ愚妻が二か月ほど行くことになった。この話を愚妻の友だちから聞かれた水府先生の奥様が「ぬきすて」と「文学」の水府のれんをみやげに届けてくださった。あれから一度もお会いしていないのにありがたいことである。

(不二田一三夫)

## ▼毎月の句会場をスタジオと仮定すると、

イレクターは監督、司会や受付の方々はそのスタッフ、そしてデレクター以下がそれぞれ主役となり、月間賞杯受賞者はその月のスターとなります。句会もまた楽し。葉子

信条だったから、一度憎くまれ口もたいたのに、水府先生はご自分の門下のように可愛がってくださいました。

★城東病院へ入院されたからもよくハガキをいただいた。ボクが、「川柳塔」の機関誌をつくる

「機械」として、また呼びもどされたことを報告申しあげた手紙は、ついに読んでいただけなかったようである。投函した二日後に逝去されたからだ。

★松江へ愚妻が二か月ほど行くことになった。この話を愚妻の友だちから聞かれた水府先生の奥様が「ぬきすて」と「文学」の水府のれんをみやげに届けてくださった。あれから一度もお会いしていないのにありがたいことである。

★松江へ愚妻が二か月ほど行くことになった。この話を愚妻の友だちから聞かれた水府先生の奥様が「ぬきすて」と「文学」の水府のれんをみやげに届けてくださった。あれから一度もお会いしていないのにありがたいことである。

★松江へ愚妻が二か月ほど行くことになった。この話を愚妻の友だちから聞かれた水府先生の奥様が「ぬきすて」と「文学」の水府のれんをみやげに届けてくださった。あれから一度もお会いしていないのにありがたいことである。

純良医薬



第一製薬

うちみ・肩こりに  
べタンと貼るだけ!



● 140mm × 100mm Ⅱ 3枚入

〈新型パップ剤〉

# パテックス

昭和四十一年七月二十五日  
昭和四十六年八月一日発行  
第三種郵便物認可  
創刊大正十三年通卷五三二号

川柳塔  
八月号

もたれ・胸やけ・食欲不振に

胃腸薬なら

アペール<sup>®</sup>

包装 36錠・72錠



三橋達也(東宝)

胃がもたれる／胸がやける／食欲がない／吐きけがする／おなかがはる／胃が重い／胃炎／胃下垂…に

 フジサワ薬品

国立公園 奥新和歌浦

・雑賀崎



国際観光旅館

うおまた  
魚又楼

TEL 和歌山 (44)0431・1186(代)  
大阪案内所 (641) 3 5 6 4

誇る  
海岸美を  
風光明媚な

定価 百八十円 (送料十六円)